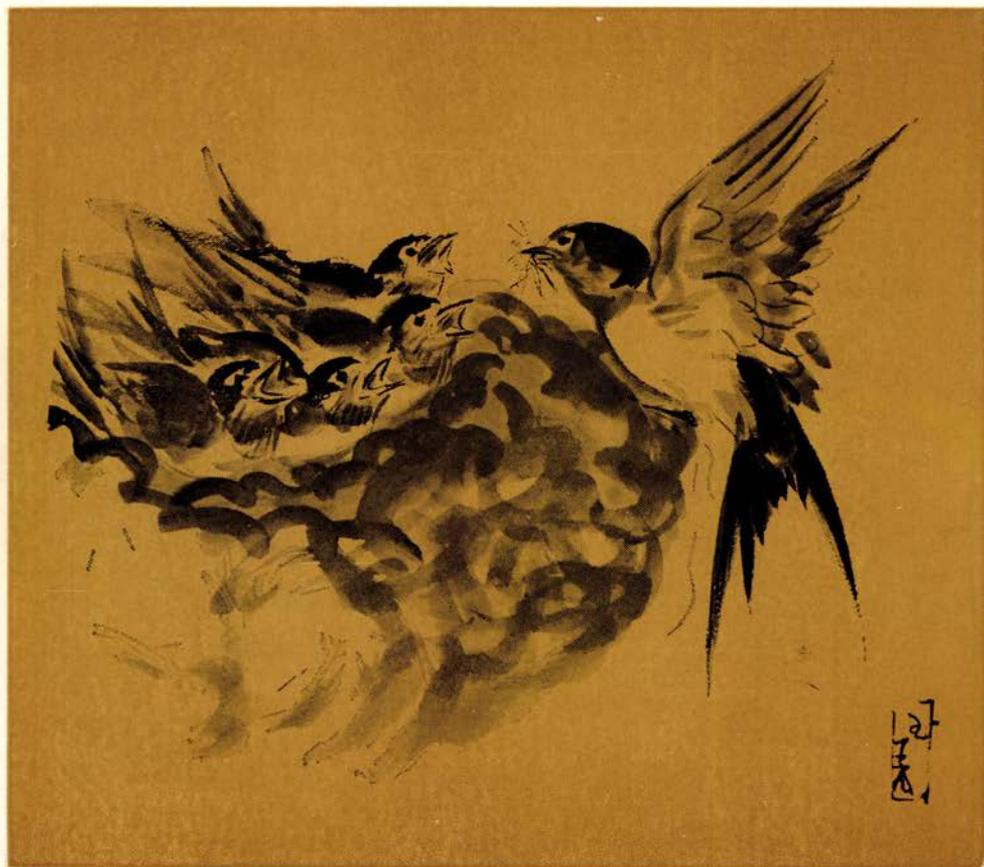


# 川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可  
昭和四十二年五月二十五日 印刷  
昭和四十二年六月一日発行 (毎月一日発行)  
(第二十一号)



No. 21

特集・今だから話せる

## 六月号

川柳塔社主催

# 路郎忌句会

日時 昭和42年7月9日(日) 午後1時開場

会場 自安寺 電話221・1478番

市電電停前千日前下車スグわかります

★梅田駅から地下鉄でお越しの方は、なんば駅下車・目標は千日前デパート。

会費 150円

★才一部 故麻生路郎先生 三回忌法要(一時半から)

司会 西尾 栗  
開会の辞 若本多久志  
挨拶 中島生々庵

★才二部 路郎忌句会 (二時から)

兼題 「行末」 選者 川村好郎  
「だしぬけ」 菊沢小松園  
「枕」 北川春巢

「聖書」 麻生霞乃

席題 (三題・当日選者と題を発表。各題三句以内)

閉会の辞 松江梅里

★才三部 晩餐会 (喜楽別館)

この会費は五百円。お申し込みは二時。会場内で受けつけています。

一応はすねてみるのも見栄のうち  
出世街道すねて媚びて裏切つて  
和を護るその限界が派手に裂け  
狂ほしいまでに老骨身を正し  
きれいに辞めたいなどと愚かな奴の見栄

中島生々庵

## 今月のことば

◎三月十九日三太郎さんの祝賀会に参列した。たくさんの有名人と再会または初対面して三太郎さんの幅の広さ、つみ重ねの厚さを更めて認めさせられた次第であるが人間は長生きだけで偉らくはなれぬ。漱石でも芭蕉でも三太郎さんから見れば長男か次男の歳、一葉や啄木は孫のような歳でなくなっている。

◎三太郎さんが、これという師匠もなく今日の「三太郎」を築いたのは道に生きようという心を徹底的に持ちつづけたせいであろう。

◎世の中には川柳に限らず有名な師匠に長年月就いたとか、晩年は朝夕側近として仕えたとか、ほこらしげに自分を見せかける人が実に多い。さしずめ私等も路郎師に何十年指導してもらったの部であろう。笑止とも笑止。

◎「たとえ一生師に侍するとも、心なきひとは道を知ることほできぬ。それは匙は器についていても味を知らないようなものだ。これは法句経（仏陀の金言を編録し仏教の要義と実生活との関係を説く）の中の語である。

川柳塔六月号

# 川柳塔 六月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

今月のことばと句帖 ..... 中島生々庵 (1)

川柳塔 ..... (同人作品) ..... 中島生々庵選 (4)

★今だから話せる ..... (同人特集) ..... (20)

大鶴喜由・山川阿茶・三井酔夢・国弘半休・木山遠二  
今西章雅・隠岐不醉・不二田一三夫・ (到着順)

近 詠 ..... 麻生 葭 乃 (19)

柄井川柳中国版 ..... (大陸巷談) ..... 東野 大 八 (22)

明 智 光 秀 ..... (川柳戦国志・十二) ..... 富士野鞍馬 (40)

秀 句 鑑 賞 ..... (前月号から) ..... 後藤 梅 志 (30)

川傍柳初篇研究 ..... (四十八) ..... (20)

前田喜代人・岡崎重義・清 博美・藤井和雄・  
川端柳風・故高須啞三味・丸 十府・岡田 甫・

か な が き ..... 戸 田 古 方 (42)

盲 目 抄 ..... 高鷺 亜鈍 ..... (19)

備前川柳社二十周年記念大会 ..... 浜田久米雄 ..... (44)

忠 臣 蔵 私 感 ..... 吉田 水車 ..... (39)

漫 画 と 川 柳 ..... 谷 沢 好 祐 ..... (50)

近 作 柳 樽 ..... 北川春巢選 ..... (32)

雅号ぶっちゃけばなし ..... 寺 田 花 宵 ..... (47)

四 国 靈 場 巡 拜 ..... 河 本 南 牛 史 ..... (51)

大萬川柳「誤算」 入選発表 ..... 清 水 白 柳 選 ..... (52)

初 歩 教 室 ..... 菊 沢 小 松 園 ..... (46)

★ 柳 界 展 望 ..... (薰 風) ..... (54)

★ 本 社 五 月 句 会 ..... (庸 佑) ..... (56)

★ 各 地 柳 壇 ..... (文 秋) ..... (59)

一 路 集  
「信 号」 ..... 関 戸 宗 太 郎 選 ..... (48)  
「視 察」 ..... 大 森 娛 句 楽 選 ..... (48)  
「童 顔」 ..... 新 岡 回 天 子 選 ..... (49)  
「シ ョ ッ ク」 ..... 森 田 茗 人 選 ..... (50)

★ 編 集 後 記 ..... 白 柳 ・ 三 夫 ..... (64)



中島生々庵選

岸和田市 内藤きさ子

絵のような落花へしばし我を置き

流儀など知らねど春の花を活け

気をつかうばかりでよその台所

螢狩りに来いと不義理は気にせず

祝い膳のどさくさ猫にねらわれる

草津の湯でも治らぬ更年期となりぬ

大阪市 後藤梅志

シャツターをくぐつて這入る風呂がえり

開つ放しのスカルノがにくまれず

満潮さん入院 (二句)

奥さんの来ぬ日たいくつしてまんネ

国立の良さが分かつてくる芝生

明治回顧 (二句)

播磨屋の立見浜町河岸の宵

天長節は雨の降らない旗がゆれ

大阪市 正本水客

出雲路に

雨気晴れようとして竹青く燃ゆ

散りそめを詫びる老女は花の下

ヘッドライトも心細げに道曲る

貝クルクル回して甘きバイの肝

ぼんぼりとさくら夜は古木に見えてくる

加賀市 那谷光郎

焦け残る山火事草月流と見る

伊勢詣で祖父感涙の大神楽

質入れに来て泣く女哀れとも

悪銭を貯めて肩書き買いたがり

おやすいご用と口がすべつた世話をする

鳥取市 河村日満

突然のように今年のさくら咲く

明日は降るらしいへ花見繰りあがり

統一選挙風景

お叩頭してテープのように出る所信

花の客へ遠吠えに似た選挙カー

応援弁士を引受けて

雰囲気へおなじ話の上手下手

大阪市 橋高薫風

一尺の雑草ながら花の数

一枚のハンカチ洗う一人旅

人を待つかたわらの花嗅ぎもして

恋の誤算金の誤算でありにけり

一日の重さ軽さよ日記帳

高槻市 傍島静馬

東大をママの誤診ですべつて来

バスガールびびびびとバツクさせ

花の留守母洗だくに余念なし

派手な服着てもスタミナ伴わず

銀婚の旅ではしやぐ妻いとし

鳥取市 森本法泉水

親馬鹿の今朝も親子で出勤し

Y氏囑託となる

定年が来ても毒舌おとろえす

共和製糖菅氏保釈

五千万円で国民の面を撫で

不渡を出しても選挙あきらめず

K君の噂

見合いOK新居の図面引く

大阪市 本多柳志

浮動票手が鳴る程は集らず

アルサロの花割勘で見戻り

親せきの方で気になる適齢期

ポストまで来て再考の余地があり

デパートのミスはマイクで呼出され

大阪市 礮弓彦

角もとれ魅力もとれてきた候補

定退と知らず散歩のポチ急ぐ

かすがいのはずの子供に見はなされ

この手紙ポストへ落して割りきれる

骨までも愛した女の親が邪魔

大阪市 不二田一三夫

寄席

手拭いと扇に年輪のぞかせる

芸は芸別れた夫と高座に出

ぶさいくなあのご面相も芸のうち

台本が読めずテープでおぼえこみ

しやべくりの自信ないのが楽器持ち

大阪市 西 森 花 村

下取りのきかぬ夫の顔眺め

選挙公報人相だけがやや違い

息子にも犬にも家庭教師附け

実印と借金かたみに子に残し

青森市 工 藤 甲 吉

あるときは泣き虫でいい地方記者

思い出の丘がなくなるブルドーザー

横綱がふんわりスロービデオです

ガンで死ぬほど有名な俺でなし

岡山市 服 部 十 九 平

守銭奴の良心五円の寄附をする

長靴を脱いで水虫風を入れ

眉毛がしきりに痒い性慾である

倒産してから冠るベレー帽

岡山県 浜 田 久 米 雄

候補者の車のなかでするお辞儀

約束の時間へ正直者が待ち

一万円そうありがたい顔でなし

百姓が野菜を買えば目を見張り

高槻市 若 柳 潮 花

静脈がこんなに浮いて見える朝

明日逢える別れへ小指からませて

忠信の出となるつづみしめ直し

逢いとうはないがお金が欲しいおます

岡山県 直 原 七 面 山

男が創造る女の仕合せ

追われた村から寄附の懇願

社運傾きお茶の葉さえも途切れがち

疑いが晴れてゆつくり拭く眼鏡

岡山県 大 森 娛 句 楽

春祭り太鼓に乗って酔いが来る

四月馬鹿昨夜の事故を真に受けず

制服がまだ離れない退職者

春覗くわらびに土の暖か味

出雲市 尼 緑 之 助

独り居の夕餉野菜物がなし

今夜も一人掛け声で床を敷き

着飾って教育ママの第一歩

討論會型の如くになすり合い

大阪市 山川阿茶

空お世辞教えられても口に出ず

へそくりのスリルも知らず一人ぼち

ローレックス時計買えそな修繕費

報酬もない役員に意地を張り

下関市 国弘半休

四国観光(屋島にて)

大師堂沈む夕日を停めて建ち

琴平にて(二句)

奥の院時間がないとガイド逃げ

明治百年近う参れと声がする

警乗が通つてスリはすり始め

尼崎市 長谷川三司

頼みごと酒の上とは思われず

葱坊主これは貴婦人にて候

爪染めて故郷の土にガムを吐き

再びA氏見舞いて

癒る日の奇蹟を信じなお祈る

大阪市 西出一栄

春うららただ恍惚と花の下

あこがれの制服嬉しお燈明

日めくりに彼岸の入りを教えられ  
夕暗が迫りスピード出た感じ

大阪市 西田柳宏子

雨降りもかまわず火事を見に走り

暴力に視線そらしてすりぬける

奉賀帳祝と香奠一緒に来

休日へ妻は用事を貯めて待ち

豊中市 戸田古方

公約を下つ端だけが気にしてる

助手席は助手席らしいのが座り

耳のいたいそのひとことに生かされる

融通のきくからくりがこわいなり

東大阪市 久米奈良子

フィクションと知りつつ固唾のむシーン

寛容の綱きれし夜のプロフィール

ぬか袋古人の知恵の肌ざわり

うらはらな言葉へコーヒータそがれる

岡山县 藤原秋月

背負つたり提げたり街の娘を訪ね

田舎から家風も持つて来た団地

以下同文めんどくさいとは言わず

引き潮のような気がする四面楚歌

芦屋市 丸川 初甫

雪祭り解ける芸術とは悲し  
傘の雪払う仕草を寒う見る  
平凡に月を眺めて恙なし  
寛永の春日燈籠の前で撮り

豊中市 寺田 花宵

犬が居て独り言では無いつもり  
植木鉢季節の順に並んどり  
花便り蜜柑の味が落ちた頃  
咲けば散る花の生命が植木にも

大阪市 石倉 旅風

恒産があつてスカツとせん男  
説教も信者なりやこそ聞いて呉れ  
通り抜け

通り抜け花に長生きすすめられ  
通り抜け今日はおわりの霧の雨

岡山市 田村 藤波

生涯の最良の日を借り衣裳  
神経が鈍つて魚に馬鹿にされ  
選挙ともなればゼンマイ狂いだし  
友だちが叱つてくれたノイローゼ

諫早市 川岡 靈眼子

醜くさをみんな見ていた庭の石  
納棺に葬具屋の顔だけやわらかし  
卒業という美しき別れ見る  
時偶の收穫に妻が美しい

岡山市 浜野 奇童

辺地へ単身赴任

ガタゴトガタゴトこんな山にも人が生き  
祝電が続々栄転かと思ひ  
娘の書いてくれたメモでする炊事  
覚悟してみればフアイトが湧く辺地

和歌山市 野村 太茂津

スモツグを氣にしい氣にしい深呼吸  
金輪際開けぬと栄螺春を閉め  
大袈かけた先生最敬礼  
聴診器ほんまに聞こえておまんのか

善通寺市 岡田 拳法

左上肺の手術を受けて

マスイ醒めあちこち疼く生きている  
看護婦と違う足音やと期待  
術後半月苦闘よさらば髭を剃り

成形第二次手術

痛みまだ去らぬのもう二次手術

愛媛県 村上旭童

休まずに働いているだけの歳

貰うたから今日はピースをすうてます

こんな家ながらつばめが帰つて来

ちとひまになつて葉桜

大阪市 中川滋雀

葉桜も乙だとプラン練り直し

冷静に話せと話のヤマを折り

晩成の質だと五十路を占なわれ

試食だけしてアンケートは書かず

岸和田市 葛城伊三郎

花の山隣の席へ割つて入り

四月馬鹿去年の顔がだましに來

散つてから天気定まる四月空

花の雨うつぶん晴らすパスの中

大阪市 西川誓二

街角で又嘘云つてる選挙戦

明日ありと思う心で食いはぐれ

諦めてくれとは親の横車

愚息就職

母親のつばさ放れて子は動め

倉敷市 水粉千翁

やりくりをしたとは言わず妻の嘘

叱られて見たいと妻は無理を言い

みだれ髪晶子のころ梳いている

丁寧代理はうまくあしらわれ

大阪市 水谷竹莊

商談が出来て茶と酒いれかわり

惚れあつた同士相性気にもせず

宴会も仕事の一つ十二月

添いとげてからは化粧も地味になり

大阪市 大坂形水

菓飲む水欲しい用社長室

見馴れない男隣りも不安がり

出迎えた家内良いことあつた顔

下関市 桜川不水

ママとパパ勝負がつかずお預かり

恋文のぬれて来るのも春らしく

亡妻十三回忌

梵鐘ながれ靈魂また新たなり

名古屋市 吉田水車

新婚さん熱海あたりで暮れかかり

人が来れば言い訳ばかりする暮らし

ひよつとするとひよつとするとよな春の宵

島根県 藤井 明朗

桜にして見ればどうでもよい天氣

膳の鯛土産用にと紙をくれ

突然に来て里帰り気をもませ

宝塚市 黒川 紫香

父うちやんの初恋娘笑うなり

先客の声は帰りそうになし

足早やと足遅を団地へ順につき

京都府 大鶴 喜由

生活力ありと見て女弱くなり

都落ち此処は雲雀に起される

きぬぎぬの女はかくも弱きもの

八代市 佐野 ト占

手ごたえは確にあつた金包み

ダンブカーに負けてデーゼル横倒し

何が気に入らぬか蟹の横に這い

ハワイ 築山 快夢起

和解への一心飲めない猪口を干し

お上手を云うて舌出す電話口

見送りの握手ですます軽い義理

倉敷市 本田 恵二朗

塩田も一と役買うて観光地

貧乏に生れ朗らかなにも生れ  
黙否権みたいな顔で留守居する

下関市 中村 九呂平

働く気ないかと六十ゆすつてみ

持つ人が持てばタオルにも色気

未だ六十妻の悋気に丸味が出

笠岡市 木山 遠二

土曜もう気圧の谷が通りかけ

日日好日人様の邪魔せぬように

老夫妻どつちの客へもどつちも出

藤井寺市 西 いわを

若葉して色の違いを見て歩く

狭い部屋かくれんぼする場所があり

満二才に握手をされてこそばゆく

大阪市 今 西 章雅

ばあちゃんやんの養老年金孫せびり

選挙区へ知人二人が出て気楽

水臭い奴やと禁酒からまれる

明石市 家 沢 薺花

お通夜して最年長を労わられ

早咲きの寺で始まる花便り

ハネムーン二度目は方角変えて行き

奈良県 木村 十悟

僕と乗務員だけが起きてる終電車

落第した御かけ生活の基礎が出来

扶養家族が喧しいから診てもらい

倉敷市 野田 素身郎

雨宿りもまじりラツシユの駅ふくれ

張り合つて無理して結婚して敷かれ

花散つて望楼元の景色なり

竹原市 山内 静水

小修繕してるが如しコンパクト

自転車に乗れば気にする膝小僧

絶景は霧の底から朝が明け

岡山県 横山 一声

庭ブームせめて盆栽おく団地

べんちやらと知らず候補者票を読み

入学金の額まで自慢らしく言ひ

香川県 三井 酔夢

入学が二つ終日かしまり

新築の母校冷たい壁にふれ

子犬もう嘘とまことを見破れり

平田市 久家 代仕男

休診日訪えば奥から牌の音

メニュー手に父の財布へ遠慮せず  
凡才のおかけ脳波に異状なく

大阪市 金井 文秋

七円で済んだ楽しい長電話

むしやくしやは着物を買って来て晴らし

律義者借りてる重荷のしかり

奈良県 西辻 竹青

孫の句

ある日ふととうちやんおつ存命たらと孫は言い

お祖父ちゃんもあるけどと通知簿

父のかわりと人は言うけど孫は孫

倉吉市 奥谷 弘朗

ひな祭ねずみの囁つたのも混じり

儲かれはやると言うのが仕事かい

風に動かず天辺の月想う

熊本県 有働 芳仙

一票を稼ぐ脚絆を巻いて行く

満員車奥から一人しほり出し

奥さんの顔見たい顔かぶりつき

京都市 都倉 求女

親の欠点そろそろ子の目につきはじめ

今の娘はおむすびでさえ買ってくる

海苔の香が芝生へまるうひろげられ

京都市 松川杜的

後任を褒めてあいさつそつがなし

底辺のくらし街の雀にも

恋愛に方程式があるジャズ喫茶

米子市 石坂新雪

七年振りの生家で(二句)

台所で食べさしてほしい里帰り

スモールをとぼし画像の父母とねる

ポケットの無気味入歯持つて出る

倉敷市 木村千容

人間は生きてる限り食えるもの

大人と呼ばれ篤実とまどえる

すらんぶとちごうあたまの軟化です

門真市 福島鉄児

蠅一匹煩惱の夜をつきまとい

女くさい室で湯上り待たされる

徒食して妻は権利を主張する

岡山県 池田古心

争奪戦チャンネル漫画の方が勝ち

寝て痛み起きても痛む身をかこち

身体髪膚バラバラになる程痛み

大阪市 吾郷玲人

菜の花は遠く野崎は近うなり

大阪へ送りまひよかと京の夜

ぐうだらな男と知れど捨てられず

岡山市 江国幽谷

仕事には誇りをもととサボらさず

しつとりと水車は春の水で廻い

警戒色なるほど蜂は逃げもせず

奈良市 宮口笛生

すつほりと帽子が深い一年生

母みんな若い学校参観日

新築

新居への構想夫婦に思うこと

西宮市 野呂鵜汀

聞かれても名は知りません熱帯魚

客そつちのけで遊んだ接待費

座布団を裏返えしても破れてい

伊丹市 小川静観堂

草根木皮ビタミンと組んでコマージュ

賈物も亦愉しかり僕の孤独

四百四病のとなりで健康あぐらかき

小松市 関戸宗太郎

落選のダルマ片目のまま忘れ

釣堀の鮎馬鹿面を見に浮び

色香まだ失せず朝湯のぬか袋

大阪市 河井庸佑

エリートのもりみんなの目と違い

これ以上昇れぬ椅子と知りながら

ひくことを知らぬ男のふしあわせ

今治市 越智一水

ひまですと女給色足袋はいている

春眠の眉美しい車窓の娘

毛糸巻く手はいとせずか愛を秘め

堺市 高崎雄声

スピッツに艶出す努力二号ひま

自己過信とうとう白髪になつちまい

金歯見しようとして何度も笑うて見せ

竹原市 杉原愛鳩

ささやかな秘密ホルモン服んでいる

同窓会女が酔うてもてあまし

筆の穂が割れて目録書きなおし

兵庫県 大江秋月

改札口小犬は柵の下くぐる

長男高校進学発表

しあわせな電話子供の声も入れ

神野駅長拜命して

出勤簿一番上に押すはんこ

神戸市 仲 どんたく

老梅も綻び初めし春の風

指名したとたんに好きと云うてくれ

死ぬ死ぬとおどして保険屋ビルを建て

大阪市 福井野迷路

人間を信頼し過ぎた交通禍

散りそめて急いで花見に行くと決め

何度目の正直かラムダ打ち上げ

大阪市 中島小石

雨仕度で出た旅先の空が晴れ

男の意地悲しきものと思う宵

般若湯老師俗人ともに酔い

高槻市 山田季賛

倅せな暮しへ妻も僕も老い

車窓楽しチビチビ飲んで一人旅

外灯の光二人へ遠慮せず

姫路市 隠岐不酔

税務署は僕のふところ知っていた

妻の名を呼びつけにする九官鳥

陳情団次回の票を聞かれたり

守口市 村田瓢太

安住の地遂になかつた逃げた鳥  
宴たけなわ花咲いてよがおるまいが  
人間は地下と陸橋へ追いやられ

富田林市 川端東雲楼

年寄の接木笑ろてた奴が死に

年寄の頑固時々黙秘権

口実に年寄のある利用価値

大阪市 福井多蘭子

安全運転祈りお花をかえる妻

鞆大事に抱え掏摸につけられる

佗し誕生日お芽出度うのひとり言

出雲市 原 独 仙

泣き面に蜂やけ酒で溝へ落ち

ただ酒で喧嘩の果てに酒を買い

這えば起て立つて障子を破られる

枚方市 宮 川 珠 笑

着服を貧しい順に凝がわれ

閑職にされてむくむく肥りだし

マネキンの乳房に触れて酔うている

大阪市 室 谷 鉄 舟

にぎりずし食通でんなどおだてられ

負けん気も弱音のぞかす歳となり

自家用車あると思えぬ頬被り

宝塚市 小 島 無 聖  
爪までが香りに濡れてレモン汁

そうめんの線泳よがせてガラス鉢

咽喉もとへ甘さ残してメロンとけ

鳥取市 藤 本 礎 山

燈明の故人もう世話してくれず

妻の笑みあきらめ切つた顔に見え

札東があればあの面張り飛ばす

松江市 岡 崎 祥 月

春が呼んでる財布すつからかんなのに

働けるからペタルまだ踏んでいる

没供養どこが悪いか思索する

倉敷市 井 上 旭 峯

立志伝恩師の助言今も生き

ゴシツプを美人は嘘にして笑い

働いた手足を伸ばす床の中

ホノルル 加 川 カ ロ 女

腕相撲みかけのよいのが脆く負け

グループに二号も交せて外遊し

うっかりと先夫の名前で呼んじまい

ハワイ 羽 佐 間 柳 葉

ストライキさせて幹部は飲んで居る

四月馬鹿騙すゆとりもない時世

大物の検査は証拠不充分

鳥取県 森田布堂

あと足を枕に猫の日向ぼこ

ジャンケンをして家中がなごむ背

ポートみな派手な日傘を乗せて漕ぎ

大阪市 川口弘生

安全弁の故障は事故になつて知り

御破算で願えぬ少年Aの罪

字体まで残念そうな置名刺

松江市 柳楽鶴丸

白票をわざわざ投票して帰り

悪知恵が次次失業保険受け

不在投票すれば新聞記事になり

新居浜市 近藤凡生

何にがなんでも金が欲しいうららかさ

夜行にし二等で浮かす縄のれん

春風を何にが不足で豆の蔓

尼崎市 岡本昭三

一票ものがしてならぬ日焼け顔

脚組んでなる程女強くなり

根っこから分家したいと出た若葉

笠岡市 松本忠三

ダルマからにらまれている祝酒

父ちやんの落書きがあり納屋の壁  
餞別を駆け足にする発車ベル

加賀市 木村一路

さくらさくら見舞の妻に連れ出され

退院近しゼンマイのねじを巻く

五十年一たす一で生きた母

兵庫県 遠山可住

世の中の広さどえらい奴が居る

わたくしが笑われますと着替えさせ

女房を五目並べてひねつてみ

兵庫県 河原みのる

手ぶらでは来まいとあてにして予算

初めから忘れるつもり傘のふだ

歯科医にて

或日フト女歯科医のシワをよむ

福井市 大山雅城

挨拶してる犬と思えば腹立たず

秒針が止まれば分針亦停まる

賞められた絵の腕前で画いてやり

熊本市 楠田英子

テレビ料理なんなく出来るように見え

組をたたけば猫は走つてき

息子就職

羽ばたきの大きく強く初巢立

宇部市 平田実男

晩酌へ妻のうちの動く幸

高利貸し二ニンが六を子に教え

コースターやれやれやれの顔が降り

大阪市 賀本昇

男にも懲りて近頃金を貯め

病妻のメモを失くした市場かご

御声援感謝しますと一人決め

大阪市 宮尾あいき

閑の無い体で閑な医者を選び

散る花を尻目柳の芽が青し

つり皮が車窓をたたく急カーブ

富田林市 浅川八郎

重患へピント外した医者 of 弁

病氣と斗つて居るのが僕 僕

崩してる姿勢の女玩具の如し

愛媛県 渡辺暁童

年金の余生をれんたんで炊ぎ

れんたんへ不実をなじりかんをつけ

呉市 林野魁光

貸ビルの夜更け不気味な灯がともし

うぬぼれに石の変化が見破れず

大阪市 児島与呂志

長女二女三女も妻と同じ声

友の客妻のしぐさは臨時めき

鳥取市 清水一保

もう一夜咲いてお呉れと花へ乞い

一票の魅力が訪ねる山の村

小松市 馬場魚山

春はまだ遠く離せぬアノラツク

月明り都心に近く薄れたり

玉野市 小谷仙山

結論から先に言つたら断われ

つくしんぼ此処も文化の波が寄せ

高石市 谷沢好祐

二人口ならば昔は食えました

傘持つて来ぬと予報がよく当り

大阪市 宮地双葉

鼻のした長い旦那とみて甘まえ

豆つぶの国にも根情の民が住み

下関市 原千里

用意万端後は三々九度を待ち

老妻の口うるささに負けておく

大阪市 天正千梢

レイ掛けた八ミリみやげ父帰る

なき師の軸再会の如胸せまり

和歌山市 土谷城石

落選で泣きもてはなす田や畑け  
咲きはこる花と一緒に散る候補

八代市 永松道雄

淋しさは今宵孫等の声聞かず

福岡県 太田湖平

風呂たきに孫の遺品が出て涙

リユーマチの足が立つたる夢を恋う

患えば一歩あゆめた嬉しさよ

泉佐野市 大工陸夫

車の免許取ればあの世が近くなり

加賀市 細呂木魯木

選挙の激しさ子等もまきぞえくつている

PTA男は端に小さく居

女房が貧乏神のように坐し

新居浜市 安藤桂仙

別けへだて無いと言う子に好き嫌い

大阪市 森本良夫

長男の結婚式近づく

友情と親への義理の品と金

式場の下見もすんでのどかな日

泉大津市 高津徹也

家柄の良さ買いました新社員

婚約の顔一杯に春が来る

岡山県 木山要次

あだ花になるとも蝶に咲いて媚び

うす気味のわるい視線がまだからみ

富田林市 岩田美代

花の下恋がほしいと言うポーズ

これほどにも言うてる目が読めず

和歌山市 西尾公作

交通地獄軽い生命がバスにゆれ

ガレージに自動車預けて二階借り

京都府 清水谷句楽坊

花と酒背むけて和上鉦たたき

花里の噂もそえて見舞客

和歌山市 二越俊爾

四年間の頭まとめて下げて置き

ベコベコと下げた反動三年半

同人の顔へ投句が遠慮する

春雨もカミナリ連れて憎らしや

★ 松江梅里

ハワイ 上田紅溪

酔眼へ思わせ振りな瞳と出合い

移転先どこでどう嗅ぎつけたか債鬼

気の抜けたわさびのような好きな人

冷やつこうまいと言えばまたかいな

薬石効なくくすり屋の社長逝く

清水白柳

控え目にして逆境を見舞うてやり

ひとたびは風に逆ろうように佇ち

妊娠を実家へ知らせ式をきめ

浅川八郎さんへ

病室へ桜 はげますように咲く

川村好郎

小説にならぬ女の愚痴を聞き

親切が三分の傘をマダム貸し

怖しや逃がしはやらぬ天と地ぞ

おめでとうそんな言葉で嫉妬する

思いあたる顔せず女声の電話

北川春巢

妻入院手術

まだ死ねぬ口癖妻の耐えてる瞳

半睡半醒痛いといわぬのも淋し

妻不在子らの料理をほめて食べ

医学会総会(名古屋)出張

会場が二十もあつて気が迷い

統一地方選挙

われながら浮動栗組だと思ひ

西尾 榮

言いたいことは明日にのぼす五十八

美容院から戻りあわてまいことか

慥無礼札おこすなり

交渉はなだめ役を一人つけ

川端東雲楼氏居を訪ねて(富柳会)

矢印に曲り曲りて花の句座

若本多久志

同情をされて易者に礼を言い

倒産も近くに社長叱咤する

五十年來の友逝く

黄疽の手を出し別れをつげた友

しきたりの通りに友も骨となり

決裁の判を逆さに押す不満

菊沢小松園

人妻の眼ではなかつた誰も居ず

働けば食えた時代の座りだこ

病ら葉の切めてきれいにかつこよく

一合の酔をぶらりと春の宵

犯罪の一步手前で夢が醒め

# 盲目抄

## 高鷲 亜鈍

世に三猿主義といわれ、見ざる、聞かざる、言わざるの三匹の猿人形に、それぞれ、目、耳、口を蓋してみせるのである。人間の知恵は、目と耳と口から取り入れるものだが、碌でもないものを見たり、聞いたり、言ったりして他人を陥入れたり、傷つけて禍をのこすところから、昔の偉い坊さんが提唱したのらしい。わたくしの元氣な頃は若さも手伝って無茶をしでかし、人に賞められたり喜ばれ

たこと、何一つとしてせず、碌に見も聞きもせず、舌足らずの口をきいたり書いたりして多くの先輩知己を怒らして、申しわけないが今では先輩に三猿主義を実行している。これが自ら悟り禅の境地から言っているならよいが、目が見えなくなり、人とも話せず、聞かない一人だけで、いやでも三猿主義をまもらねばならないと、いうだけではなんにもならない。それが悔しく腹立たしく、情けなく思っても考えても失明の業苦は、今もつづいてる。

生かされて生くるわが身をもてあましこれ氏子ヤケおこさずに辛抱せい氏子から絆を断つて神から断たぬ届かぬとこに人も光も虫の音もめしいても世界平和を祈るのみ戦争も難儀抜きさしならぬ家も又ありがとうございませうが口から出スカタンの信心日参の下駄へらすもつたいない信心出来る暇があり勃起するのを押えつつ朝詣り大般若ふり氣狂じみて見え神前にぬかずいてる懷疑癖何もかも忘れて信心が出来ず手掴みで喰うストレートの味のよさ手掴みの方が口にはよるこばれ膳に坐し杖をつくよに箸をつき

## 麻生 蔑乃

## 近 詠

悪縁か私に夢のある事が  
ぬかぶくろ明治生れの手で揉まれ  
かたつむり狭いながらも一戸建ち  
子等と別居してる氣儘を淋しく見  
早春の焚火忌中の家の横  
想念が機軸となつてふくらんでゆく  
修理中の時計のからだ社を休む



秀句鑑賞や路郎賞候補句とはまったく無関係であることをこわつておく。

## 今月のアンコール句

(生々庵)

今日も降る氣の毒そうな雨の音  
犬が居て独り言では無いつもり  
ハネムーン二度目は方角変えて行き  
花散つて望楼元の景色なり  
散りそめを詫びる老女は花の下

旅風  
花宵  
齊花  
素身郎  
水客

# 川傍柳 初篇研究

(四十八)

前田喜代人 川端柳風  
岡崎重義 高須唾三味故  
清 博美 丸 十府  
藤井和雄 岡田 甫

466 目の用心をして禿耳へ口 眠 狐 た。

岡崎||オイランの松葉かんざしが、目に当たらぬ用心をしながら、禿がオイランに耳うちをする。「かけて来た禿しばらく耳に口」(四・40)「さゝやきの目に笄をあぶながり」(宝十・松一)

清||吉原で使われていた禿は八歳から十三歳ぐらいの少女だから、そのしぐさもあどけない。ちょっとした話も内緒話のようにして耳もとで話す。目・耳・口が巧く使われている句。

藤井||細かい描写。あどけない禿とけんらんたるおいらんが見えるようだ。佳句。  
高須||「寝返りに客は目耳をあぶながり」(拾八・2)「用もないことを禿は耳に来る」である。禿は内緒話が好きであっ

丸||替。

岡田||同。ただし礎稿の「松葉かんざし」は筆の走り。御光のように十本前後させた大きな長いカンザシである。また高須氏の「禿は内緒話が好き」は、決して好きだったわけではなく客にさしさわりのある用件が多いため、そういうように教え育てられたのである。

467 たわいなく寝るも生酔ぶきび也

五 鳥

岡崎||大酒に酔って、ぶっ殺されたようにぐうぐう前後も知らず眠りこんでいるがどうかになっているのではないかと不気味。「生酔はぶち殺されたやうに寝る」(傍一・34)

清||いつもなら、手に負えない程にさわぐ男が、おとなしく寝込んでしまったのは心配にもなる。

高須||「このまま死んでもうのではないか」と無気味がるのではないか。「生酔のあまり素直で哀れなり」

前田||諸説に替「寝るも」の「もは妙手」

丸・岡田||替。

468 一日はゆゝしくみへる土用干 一 甫

岡崎||土用干ともなれば、衣類や家財はじめ秘蔵の品々を並べたてて虫干しをするので、いかにも由緒ありげに見える。

清||少しの家財でも、並べたててみると案外に場所をとり立派にも見える。

藤井||ゆゆしいから祖先伝来の武具類である。御先祖様はえらかったナとの替辞

がふくまれている。

高須 藤井説贊。平素は余り出さぬ祖先伝来のものを陽に当てるため出したので、その日一日は、わが家も「ゆゆしく見えた」というのである。

丸・岡田 藤井、高須説贊。

440 榎茸はへたに異名もふ付ず 兎 弓

岡崎 徒然草の良覚僧正の故事にもついた句。良覚は僧房の傍に大榎があったので「榎の僧正」と呼ばれていた。僧正はこのアダ名を嫌い、榎を切り払ったところ、切株が残っていて「切株の僧正」と呼ばれた今度は、この切株を掘り起こすと大きな掘池ができ「掘池の僧正」とアダ名された。さて、榎茸は、この榎の僧正の故事の縁語で、取り払った榎の切株に榎茸（なめたけ）が生えても、さすがにもうアダ名はつかなかったのがち。

高須 一本であまた、び和尚焦れ

(一・六・11) 「榎一本に二度まで腹を立て」(一七・41)

丸・岡田 贊。

470 ほろ蚊帳を馬鹿くしいと酔が寛

秋 紅

岡崎 酔がさめて目覚めてみると、手軽くありあわせの小児用のほろ蚊帳を伏せてある。大の男に……である。(夏の宵の蚊

を防ぐ女房の心使いであるが)。

清 馬鹿々々しいという言葉の中に、テレかくしが含まれている。

高須 晩酌のゴロ寝、寝るところでない所へ寝てしまった夫へ、とりあえず小児用の蚊帳をかけてやった。目の覚めた夫は自分にかけてあるホロ蚊帳を馬鹿々々しがる

前田 贊。この句もうまい。「馬鹿々々しい」と「酔がさめ」との響きに同調する

丸・岡田 贊。

411 白髭八年寄をまく社なり 水 砥

岡崎 向島にはあちこちに名所があり、遊山でにぎわった。そのひとつの猿田彦命を祭った白髭神社は、若者たちが夕方になると、同行の老人たちを置いてきぼりにして大川を渡って、吉原にくり込むにおあつらえの神社だった。

清 贊。向島の名所は、紅葉山、葛西太郎の鯉料屋屋、三囲神社、牛の御前、そして白髭神社などである。「年寄は皆白髭でまくつもり」(一三・7)

高須 白髭と「年寄」とを掛けたもの、白髭神社が、川をへだてて吉原とちよ

うど同じくらいの距離にあるので、この類句はたくさんある。

丸 贊。年寄自身また「白髭で年をかへり見別れたり」(貌・10)という句もある

岡田 同。

412 姿見へ替女つくねんとうつる也 眠 狐

岡崎 きれいな写真句。替女が背をまらめて、つくねんと座敷の隅にすわっているのが姿見に写っているのを「つくねんとうつる」と言いあらわして妙。

清 目が見えれば、普通の女のように真剣な眼差しで覗き込むであろうものを。無用の長物を前に、その姿がいかにもさびしくうつる。

藤井 姿見は、朝夕その娘さんの姿を

きらびやかに写している。盲女は勿論前に

姿見がある事は知らないで、つくねんと傍

に座して待っている。作者の視線は盲女を

見ずに、その鏡面につくねんとした姿をと

らえて句を作った。今までの句の中で最高

の句であろうか。

川端 哀れをさらりといひあらわして

妙。川柳の一面面である。

高須 一つくねん」とはうまい表現。佳

句。現代的にいえば「姿見へゴせつくね

ん」とはうまい表現。佳句。現代的にい

えば「姿見へゴせつくねんと写ってる」であ

る。

丸・岡田 同。

## 柄井川柳中国版

## 東野大八

北京新平路に住んでいたとき、大家さんの揚文天氏（日本の「早大卒」）が、私が川柳人だということから「中国にも竹枝という川柳によく似た短詩がある」と教えてくれた。早速石原青竜刀氏（徹徹の筆名で中国通）に、その旨話すと「いや、川柳とはまったく性質がちがう」との答えだった。

しかし、竹枝とは果して何ものか、私の関心は容易に消えず、「燕京文学」同人の飯塚朗に会って訊きだしてみると、川柳ではないが、まあ、中国の川柳みたいなものだね、という一応の説明をきくに止った。

ところが、二十五年後もたったこのほど、岐阜の劉喜章さんと、ある日ビールの満をひいているとき、そのバカ話の中に竹枝が飛び出してきたのだから、世の中は面白い。早速私は二次会の席を設けて、いろいろと竹枝の勉強をした上、この人の蔵本まで拝借することに成功した。もとより、そんな程度にわか勉強ではずかしいが、今回は中国にも川柳に似た短詩と、面白い人物のいたことの話を書くとしよう。

まず、幸田露伴の「怪談」（昭和三年刊）に竹枝に関する一節がある。

「楊廉夫は、一代の文宗で、明の天子に礼遇されてもフンとあしらったほどの、ごう骨のあった男。山陽が日本楽府を著わした時、廉夫を酷評しているが、それはちょうど馬琴が西鶴をそしったことに類している。（中略）廉夫は洒落極りなき男で、四人の美女を侍従させて西湖に浮かれ遊び、西湖竹枝などという風流な詩を作って一時を騒がせたぐらゐの先生。（以下略）」

露伴は、明代から元代の末（一四〇〇末～一五〇〇年にかけて）の楊廉夫を非常に高くかっていたことは、右の文の前後章に詳しい。楊廉夫のことを書くとき長くなるし、本文の主題から逸脱するので割愛するが、とにかく大した学識の癖に、放とて無類、酒と女の中で、八方筆をもてあそんで、戯文山積したり、彼の死後、門下生や友人、後輩がいろいろ加減に彼の著書戯筆を整理したので、明確にどれが彼の著作したものであるか皆目見当がつかないところ。

こういうタイプの人間は、当時珍らしくはなかつたらしい。というのは、彼が生きていた世情は、日本の元禄時代に似通っていた。宋代末期ごろから、中国の都市も商工業が勃興して、民間のギルド組織が確立され、その富の増大は必然享樂的消費経済を誘発し、民間は団結して、官久自富の為政者たる官辺に、一かどのレジスタンスを試みる風潮にあり、それが南宋、元、明代にうけ継がれていった。

デカタンスでニヒルな、知識人の時流に対する反発は、中国も日本もどこか共通点をもつのは興味深い。廉夫の作文の亜流が、雑乱無章に仲間内に散逸したのもその現れであつたらう。

長くなるので本文に入る。廉夫の作と露伴も保証している作に「聯芳樓記」というのがある。ストリーは簡単なので、問題の竹枝を織り込み紹介しよう。

姉が二十で、妹が十八、上が蘭ですみれという名の才女兼美女の住む蘇州に、能仁寺という寺があり、その住職が花草の彩管に秀でていたので、美人姉妹はよく遊びに出むいた。当時、紹興で有名な楊鉄崖（名は維楨、明、元時代の宮廷詩人）が、西湖竹枝曲を編み出し、大層な人気で、その同好の志は宮廷で六百人におよび、浙江省を中心に八方へ行ははじめておる、と和尚に教えられた姉妹は、なんのそんなもの、蘇州とて竹枝詞がなくてどうする、と負けん気を出して一日数百種を詠じた。ところが、それを書店で売ると

忽ち売り切れ、大当り。

この二人の才女美女ぶりに、一人の若者が魅了され、二人の住む聯芳楼にやってきたが断崖絶壁の頂上にある館なので、どうすることもできず、毎日崖下へきて上を見上げて思案投げ首。この姿を上からみつけた姉妹は、男が若くて男前なので、ボーイフレンドになつて貰うことに相談一決、上からカゴをおろして男をひっぱりあげた。男は二十二歳のブレイボーイで、ついに二人をモノにして二人妻にしてしまふ。めでたし、めでたし。

この話の文章は至って短いのは、竹枝詞のやりとりが中心になっているからである。楊廉夫の遊野郎気分が、粋筆にのつて縦横というところで、いわば風雅な漢詞調の竹枝詞が売りものというわけである。

「中国語新辞典」に拠ると「竹枝詞」七絶でその地方の風俗サ事を詠じた詩」となっている。だが、ここでは風雅一辺倒で、特色満堂、おいろけに徹しおかしみがないのが残念

灯はほのかに 香は絶え  
ねやのとばりのゆるる宵

水にたわむる魚に似て

西に東に およぎゆく

(つぎは姉妹連歌)

うすぎぬの靴下 うわの空

びんかきあぐる まくらもと

よしや浮名の もるるとも

悔むものは 今宵のなさけ

本文中に竹枝は十七句ある。廉夫が、西湖竹枝を創めた楊鉄崖の西湖竹枝に対し、なん

のオレとて負けるものか、というので、右の一文をモノしたあと、レキゼンたるものがあ

る。八句からなる詩の一体の律詩に対し、竹枝は七言絶句である。漢詩の一章から分離独立させ、異なるその七言絶句でやりとりをする方法と、またその連曲を切り離して独立させた場合も多い。

中国の洒落言葉は、大別して四種ある。日本でいう「隅田川のごみ」という上句にあたる設定語に対し「杭(くい)にかかったら離れない」という下語のおかしみと全く同様の手法だ。つぎは、同じ音を、全く別の音のものと転意させる。三番目は、日本でいう落語の「考えオチ」と同じ手口のものである。

上句の設定に、下句が説明の役をする以上の三種に対し、いま一つのおかしみは、たとえば「一二三四五六七」と上句がきて、「忘八(ワンパア)」と下句で落す、連想の肩すかしのいわば快味にある。

中国人は、日本人以上に洒落っ気が多くて即意即妙の手ぶりは日本人以上ともいえるほど。文字と言葉の御本家たる中国の洒落っ気は、知識人ほど深遠絶妙を極めている。北京上海などで中国文の春本をよく手にしたが、その文詞字叢の見事さは、リアルなおいろけを通り越して、浅学非才のわが身が、お門ちがいのところで赤面してしまうほどだ。

余談だが、中国は竹枝詞だけに止らず、古来、漢詩にもふざけたものも多かったらしい。隋志に笑林三巻があり、唐志に啓顏録が

ある。後者の筆者は候白コト白君素でコッケイ能弁家で「好んで俳諧雑説(頓智小咄)を作り、彼のいる所、野次馬が市のように集った」とある。隋の高祖はその声名をきいて秘書にとりたてたが、宮中の生活になじみず一年で死んだ。唐代まで候白の名は巷間に著名で、候氏と白氏は結婚できなかったという、つまり候白となればモノ笑いのタネにされるからだった。

とにかく柄井川柳氏は、中国にもそこ、ここにいたことは確かなだけに、八右衛門の川柳点のアイデアは、竹枝や候白の文詞からのヒントであったとも私は考えたりする。万葉・古今の和歌が漢詩の強い影響をうけたこと、竹枝が柄井川柳の三百年以前に、中国の人口に広くカイシャしたことを考えると、その伝来も必然のことと思われるからである。

若本多久志著

川柳「親ハハ子心」

定価 二百円  
送料 八十円

要望にこたえて謄写印刷で百部限定出版

申込所 大阪市南区鯉谷仲之町二〇

川柳塔社

「親ハハ子心」係

## 路郎主幹の講演

## 大鶴喜由

引き上げて泥をぬぐえば他人の子だ

近畿地方を襲った室戸台風があつてから二カ月くらい過ぎた頃、川柳雑誌社の本社句会が日本橋倶楽部で催された、例によって路郎主幹のご講演があつた。もちろんこの未曾有の台風に関連した句をあげて大災害の実情に触れられた。講演が進んでこの句が取り上げられた、その時突如参会者の一人が声を大にして「冷たいぞ」と叫ばれた。先生は「あとで話したいから来て呉れ給え」と言われ講演を続けられた。そして済んでから約二十分くらい奥の間で話し合われた、この句は私が堺三宝浜の災害の状態を句にしたものであつた。

それから星霜三十有余年私はこのことを先生に聞こうとはせず、先生も私に話そうとはしなかつた。しかしそれからの私は鋭い句は創ることが直接間接死に連なることの句には触れなくなつた。手もとにある世界名詩

集でさえ半分以上の詩はこの悲しさやるせなさがあり私の心にからみついて来る、たとえいい回しがうまいとだけでは私には割り切れない男になつた。過ぎた日の炭鉱事故でも夫を亡くした妻にカメラを向けて涙と言葉を撮られた。またこの間の飛行機事故でも、ずらりと並ぶ棺の蓋をあげて身寄りを捜し求める姿がテレビに写された。ああまでせぬでもいいのにと誰しも言われるが、次に来るであろう天災、人災に対しての教訓にするため当事者も涙をのんで非情をあえてするのだろうか。私は広島原爆禍の救護に行つた時生死の境の人を目の前にして働き、また結核療養所患者のハンストの時は弱り行く人の状態を目の前にみせつけられた。しかし私はあのこと以来句が出来なかつた。否、句を創ろうとする気が起こらなかつた。

## 吉屋信子に

## 似てると言われて

## 山川阿茶

もう四十年近くなりますが朝日会館の七階

か八階にアイススケート場があつて、よく行ったものです。その時来ておつた片山とか稲田悦子らはスケート界で名をなした人々です。当時も私は今のようなおカッパのヘヤースタイルだったせいか、よく吉屋信子に似てると言われました。

ある日このスケート場で二三人の男の取り巻きと私の所へつって来たのがほんものの吉屋信子だったんです。

「こんな人に私似てんの」と言つて彼方へつって行きました、誰れか朝日の人にも貴方に似た人があるのですよ」と言われたので見に来たのでしょうか。私のそばに朝日の写真部の人と社会部の人がおつたのですが「こんな人とはなんだ失敬な」と怒り出し「ついつい行つてあげますよつて」「似ていてこつちが迷惑や言うたんははれ、お初ちゃんの顔が潰れまっせ」とアジられてついその気になつて吉屋信子の所へつって行つて「似ていてこつちが迷惑だわ」と言つたんです。この事があつて以来「こんな人の書くものは一切読まません」。



これも谷崎さんがまだ岡本におられ今の松子夫人は根津清一夫人（細雪の清之助）その前の丁未子（チョコの愛称）夫人とも結婚されてなかつた頃の話である。

その頃宝塚のダンスホールに谷崎さんのお気に入りのダンサーがあってそれが「貴方のように似てあるねん一べん見に行こ」と妹尾さんに誘われ西宮北口で待ち合わせて宝塚へ行つた。その時妹尾さんと同行されたのが谷崎さんで初めて紹介されたわけです。ところがそのダンサーはスケールも大きく少し私に似てるように思われぬ、おそらく谷崎さんも似てると思われぬ、おそろく谷崎さんしかし谷崎さんも私も「こんな人に似てるの」とは言わなかつた。

アジられてかつとなる程若かりし泥くさい若さへ微笑笑なつかしく別嬪でない方の例によく引かれどつちも自尊心ほどの顔でなししよせんは女 スター心理の鼻柱男ならアツパーカットの飛ぶところ

## 母 四 人

### 三 井 醉 夢

女も四十路を越す頃になると、次第に厚かましくなつて来る。ご多分に洩れず私にもそ

の傾向が見え初めたのを、編集子はお見通しなのか、この原稿を依頼された。さして抵抗も感じないでゆけぬと駄文を書くあたり、まさに厚顔無恥の類かも知れない。

宿命——と言えば大仰過ぎるが、私の生い立ち、すでに複雑な人間関係で織りなされる幼ない時、母と呼ぶ人が四人もいたのである。少女時代にありがちなセンチメンタルは激しく私をゆさぶり、この醜い大人の世界に精一ぱいの反逆を試みた。この世の不幸を一身に背負っているという絶望感、私自身をヒロインにさせ、生きるということに何の意味があるのかと、悩み続ける娘になつていった。

上すべりなベシズムにとりつかれ、(汚れない美しい二十歳で終止符を打とう……)と思いつめてしまった。自分の意志で、自分の命を絶つ……という勇氣ある行為にあこがれた。未熟な精神の空転は、孤独からの逃避を計つたのである。その当時、自然の大きな慈愛に気づかなかつた愚かさ、やはり無軌道な若さだつたのだから。大量に飲んだプロパリンは、一月余り私の視力を奪い、手足を麻痺させてしまった。

それから二十年——、今どっかりと腰を据え、荒波にもみもまれた厚かましい女の顔である。誰が、そのかみの、なよなよと折れかかつた繊細な少女の面影を想像出来るだらうか。

うか。  
歲月は自殺未遂の娘に見せず

実母にめぐり逢えたのは、三十歳の時だつた。少女時代のオセンチなど笑止千万、お涙頂戴のテレビドラマじゃあるまいし、私は案外淡々として対面した。すでにその当時、私も二児の母であつた。その昔、恋しさに涙した実母が、目の前にいるというのに、別段血がさわぐわけでもなく、「お変わりございませんか、」などと垣根越しの挨拶しか出来なかつた。手を引いているわが子に、「おはちゃんにバイバイは……」と平然とした駅の別れだつた。これは最大の虚勢だつたのかも知れない。とにかくタイムリングがずれ過ぎていた。

三十が邪魔して母と呼びきれず

この句は、川柳雑誌に初めて投句して、ぬいて頂いた句だけに、私にとっては、思い出深いものである。その後、ようやくこの母との心の交流が始まり、時たま消息など知らせあう絆が生まれた。

夢を見た変りないかと母の文

人生にくたぶれて来て母恋し

幸福の仮面実母は知つていた

昔の人はいいことを言っている。

「死んで花実がなるものか」と。  
 たった一つしかない命を、そうむざむざと失ってたまるものかと、今更ながら生きていく幸せをありがたく思う昨今である。

平凡に生きる幸せやつと知り

## 夜逃げ

### 国弘半休

十八歳の秋、新聞の広告を見て下松の歯医者 者の書生を志願した。

当時村では「医者が一番偉い」、「書生になれば勉強が出来る」と思い込んで選んだこの道が実際は私の甘い考え方で軽率なことをしたのである。

医院に夕方着いた私は家族や使用人の前で紹介され、夕食を共にしただけで第一日は終わった。第二日目は六時に起きてお掃除、昼間は歯型取りの手伝い、おおむね勉強は午後七時から九時まで、それも先生が手を取って教えてくれるのではない。埃をかぶった書棚から先生の古い書物を引出して「これを読

め」といった式のものである。しかし別に授業料を払って教えてもらおうわけでもないで、これも己むを得ない。

ところが第四日目の夕食後のことである。

二階の自分の部屋で分らぬままに医書を繙いていると下から風呂へ這入れという声がある。もうそんな時間か？と急ぎ入浴に向かったところ、私の面前に湯上り姿の女がいるではないか!!

これを見て私がHな考えを起こしたと思われるかも知れないが当時の私はまだそんな不良青年ではなかった。それどころかその瞬間私は強い憤りを感じたのである。

元治元年生まれの私の父は頗る男尊女卑の持主で私の家の行住座臥すべて男が優位に置かれていた。もちろん入浴において固くこれが守られていたのである。書生だからと言って何も私が女の這入った後の湯を使わねばならんわけではない。

湯上り女の正体は後で先生の妹さんだとわかったので、むしろ当然の事であったかも知れないが私にはそれが当時理解出来ないで、その夜家人の隙をうかがって夜逃げしたのである。犬一匹吠えない真夜中を二階の窓から荷を吊し、電柱を伝って街路に降り一目散に下松駅に走った風景は誰も知らないはずであるのに駅へ着いて車中の人となるまでの怖さ

黄銅六角ボールトナツト  
 及び特殊換物全般

合資会社  
 西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地

TEL (06) 三四五二一四

夜間 (06) 四四〇八

と云ったら、とても例えようがない。何も他人の物を盗んで出て行くわけでもないのにそれが怖いのである。

家に帰ってからも夜逃げしたことには触れず、それから間もなく私は鉄道に採用され、三十六年間を国鉄に奉公したのであるが誰一人として私か夜逃げしたことを知ってる者はいない。しかし一度は誰れかに話して、「泥棒と夜逃げはするものでない」と言い聞かせて置きたかったのである。

三代目継いで和服が良く似合い  
 表札を確めに来て吠えられる  
 古池や埋つて蛙寄りつかず  
 胸襟を開けば君も明治にて

俺一人叱られてすむ嘘を言い代議士はたつた二十日で日焼ける団地ビル鳩の住まいに似て可笑しアンケート責任はない〇をつけ土蔵を残して旧家草がはえ始末書を書けと言うから書いただけ

## うちの嫁

木山 遠 二

長男笙二の妻霞子は、わたくし気に入りの嫁です。思うことはハッキリ言う性質です。それに実行力があります。

がんと云うかも知れぬので診せしぶり

「腹の調子が近頃どうもおかしい、がんかも知れぬ」という私を否応なしに引張って国立病院へ入院させたのは嫁でした。診断の結果、がんではないとわかり腸の不要の箇所二十センチ程を切り捨てただけで、手術後の経過も順調でしたが、四十日も個室におるときがだんだん頭へ来てやりきれず、

にこやかな天使の出番こそ待たれ顔の上の電灯と一対一の夜

再手術せねば或はとも思う

ノイローゼはお止しなされと天使云う

厭な日は天が雨まで降らせたり

枕許の紙片へこんなことを書きつけているのを見て

「退院退院、お父さん退院しましょ、ノイローゼはいけませんよ」

医者意見聞いて即時退院手続をとったのも嫁でした。

さてこの嫁が当方へ與入れた當日のことです。元來與入れの際の花嫁というものは、俯いてスロモーに歩くものとされていますがうちの花嫁はその型を破ってふだん同様に真っ直ぐ顔を上げ、サッサと歩いたのですから「そら花嫁だ」と近所のおかみさんたちが道へ飛び出した時には、もう花嫁の後姿しか見えなかったのです。三三九度・記念撮影等等を無事に済ませ、私は親族の連中と別室に控えていますと、其処へ家内がアタフタと来て私の袖を引き

「嫁が宮詣りをしないと云います」

「聞き違いではないのか」

「まさか……是非とも詣るのならハイヤーに願います、と言っています、困りますわ」  
当時宮詣りは歩いてするのが、わが地区で

のしきたりでした。これでまた一つ、計二つの型破りをやったなと思いましたが

「よし、そんなら宮詣りは抜きだ」

次は披露宴・新婚旅行出発と滞りなく済みホッとしました。その後私はこの日の事を川柳雑誌(三八二号)へ痴人の柳信として書きました。書くとなると矢張り潤色もしたり、付足もあって事実とはだいぶ違ったものになりました。その頃わが地区に三十名程の柳人がありました。近所に住む柳人泰山は「川雑を読んだよ、うわさを聞いてわがままな花嫁もあつたもんだ、矢張り町の娘は田舎へはだ

色紙短冊  
書画用品

大塚がしる

丹月堂

宮中マニマニ

めだわいと思つたが君のあれを読んで愉快になつたよ、なかなか頼もしいお嫁さんだよ、結構々々」と喜んでくれました。うわさには直ぐ尾鰭がついて、面白おかしくなるものですが、泰山はそのうわさよりも、わずか一ページ足らずの活字を信用したわけです。その時私は、くすぐったい気持ちでただ泰山の言葉を聞くより他なかつたのですが、今ならば「あの時書いたものは半分ぐらい付足りがあつたんだよ」と本当を言つてやれるはずですよ。というのはいずれから八年もたち嫁の評価も一応安定しているので黒星にもなるまいと思つてからです。その泰山も今は亡き人です。あの世で苦笑している事でしょう。

## 受 験

### 今 西 章 雅

私は昭和二年阪大薬学部の前身の大阪薬専を卒業し、その年徴兵検査を受けた。

八尾中学の四年の時大阪医大（現阪大）の予科を受けたのであったが、猛烈な脚気にかかり、二学期の学期試験も受けずに休学したので、五年生にはなれないと思つてい

たのに、どうしたはずみか百一人中の百一番で進級出来た。それで五年生の時も進級組に這入らずのらりくらりと卒業してしまつた。

考えてみると中途半端の気がしたが、大学入試パスの自信もないので、家から一番近い当時日本橋五丁目にあつた大阪薬専を受験してみた。私以外進学組から六人受験している。補欠入学でも出来たらぐらいいの気だから答案の出来具合も友達には聞けない。どうにでもなれの気で、一応発表を見に行つた。二十名程の補欠を見たが名前は無いので帰ろうと思つた。ところが友人がお前通つていゝぞと云う。

友達に腕を引っぱられて尻から見に行こうと思つたら、もつとこつちだと十四番の名前の所に立たされた。今西頼光というような名前はざらにないので、「この学校はどうかしとおる。きつと間違ひやろう。」と言つたら、後に他校の受験生ですべつた人が急に泣き出しそうにしたので、あわててその場をのけた。私の友人は全部パス、私も不面目を喫し、済んだ。ところではじめに言つた徴兵検査では今のように近眼でなかつたので、検査はつきつきしたパス、最後に四肢の異状を見る体操もパスした。ところで私の左腕はひじの関節がちょっとずれていて、運動には差支えないが、百四十度ぐらいいしか伸びない。とたんに検査官は「おしい」とさげんだ。徴兵

直原 玉 青 著

「新しい南画と  
俳画の描き方」

創元社出版  
価 二千元

本社でも取次ぎいたします。

司令官の前へすわつた時、司令官は一言も物を言わずしばらく顔をみつめていたが、丁種の紙へボンと印を捺して、もう帰つてもよいと放免になつた。

戦時中在郷軍人会から入会せよと言われて家内が知らずに会費を払い、あとで戻してもらつた事もあり、一度は警防団の副団長ともあるものが、なぜ訓練をさぼるかど叱られた事もあつた。警防団にも当時徴用はあつたが、一回も徴用は来なかつた。団員の徴用には団員証明を数知れず書いた。団員証明があると徴用は大抵免除された。それで亭主関白（丁種）の書いた証明書は良く効くだろうと私のせいのように自慢をしていた。その頃覚醒剤のヒロポンがあつたので、空襲警報が発令されると、これを持って出かけた。私はのまなかつたが、一度だけんで失敗した時がある。私はもたれるところが無い時は眠つた事はないが、ある夜団長とも一人の副団長が眠むたさうだったので、三人で錠剤を分け

てのんだ。二人はそれで眼がさめたらしいが  
 かんじんの私、椅子にすわったままでは寝た  
 ことのない私だけが二時間ぐらいいくくりこ  
 くりとやったらしい。目がさめた時、すこぶ  
 る頭がすっきりしていたが、君は睡眠薬をの  
 んだのだらうとひやかされた。川柳とまだ縁  
 はなかった。

## 女難と貧乏

### 隠岐不酔

君がとっておきの「今だから話せる」を何  
 か書けとのことである、編集子は僕の過去を  
 知っているのだろうか？編集子が僕に山をか  
 けているのだろうか？どっちにしても余り気  
 持ちよいものではない、どのトツテおきを書  
 こうかと苦しんでいる、それもそのはず、川  
 柳歴こそ浅いが何もかもやり尽して還暦を迎  
 えた「六十の手習い何から始めよか」で川柳  
 に志したのが五、六年前、その当時は病院生  
 活といってももちろん病床である。母親の遺  
 言にお前は女難の相があるから女には十分注  
 意するようにとの事であった。その女難があ  
 るように産んだのは誰の罪と言いたかったが

十円を投げて女難までたのみ  
 と神たのみする程親孝行の僕であったが、そ  
 のかわり貧乏神に身入せられた  
 貧乏神何時まで俺につきまわる  
 貧乏神出口が分からにやおしちやるか  
 ごもっとも日給三十五銭からの薄給でいつ  
 もキューキュー会計係に月給袋を書きなおい  
 てもらって素知らぬ顔でソツクリ？家内に渡  
 したものだ、年末が来れば  
 ボーナスが妻をおこらす種を蒔き  
 でいつも家内は花見と年末がなけりやエエの  
 とこぼしていた、しかし  
 オイコラと呼んで平和に五十年  
 である。矢つ張り妻はよいものである。  
 今だから話せるの序言、いづれ機会があつ  
 ておゆるしが願えるなれば、また「とってお  
 き」を小出しさせていたきたい。  
 やり直し出来ない俺はもう六十

## 安倍野支部は

やめてしまえ！

不二田 一三夫

たしか昭和三十三年の新年号だった。「川

柳雑誌」の年賀広告に、安倍野支部（今の南  
 大阪川柳会）が出なかつたことがある。

「年賀広告をどうするか」というハガキを  
 葎乃先生から故須崎豆秋氏に出されたらしい  
 が返事がこなかつた。そこで、こんどは菊沢  
 小松園氏に電話かハガキでたずねられたらし  
 いが、これも要領を得なかつた。

「安倍野は誰が支部長なのだ」と、路郎先  
 生はご機嫌ななめだつた。それにもう一つ、  
 新年号編集中の十一月旬会が十二月旬会に、  
 出席者四人という、名門安倍野支部としては  
 めずらしい惨々たる旬会になつた。

「やる気がないならやめてしまえ！」と、  
 先生のご立腹はたいへんなものだつた。いく  
 らばくがとりなしても先生は頑としてお聞き  
 いれなかつたのである。

「それほど言うならキミが支部長になつて  
 安倍野を建て直せ」とおっしゃるのだ。  
 こんなことは豆秋氏や小松園氏に言えなかつ  
 った。そこで文秋氏をムリヤリに支部長にし  
 て、その荒波を乗り越えたのである。

麻生路郎著  
**新川柳鑑賞**  
 定価 二五〇円  
 送料 一二〇円

橘高薫風著

れもん

送料共  
 五〇〇円

# 秀句鑑賞

前月号から

## 後藤梅志

物干も春色うごくものを出し

(水窓)

都心部のビル窓から、谷間のほうを見ると、物干台が見える。がんじょうな物干には外出着もあれば、肌ジパン、ねんねこなども時には見える。風のある日は、洗濯物が片寄って、よれよれになっていることもある。なんのことはない世帯まる見えで、奥さんが外出したのがすっかり分かる。その中に、すぐ目につくのは、なまめかしいジバン、さぼしである丸帯などで、其処に住む女や、家族の人柄まで分かったもの。この句。「春色うごく」は、何処にでもある風景、出色である。

好きというよりは家計に合わず鯖

(きさ子)

そうは言っても、作者は鯖が好きなのである。サバは大衆的であり、女性的だ。あの、青光りのする切身の色は、ちょっといやらしいが、味噌煮、しお焼き、キズシとみなそれぞれの味を持つ、あきがこないの

ある。家計簿をつけていると、サバ、サバ、とつづく日があるのも、ほほえましい。

文句を言いながらも、旦那様は、奥さんにマケてしまうもの。「まー食べてごらんない」いつも奥さんのほうが勝ってしまう。

凧よりも上で一服喫う時

(齊花)

この句を見ると、「凧よりも」が素晴らしいう上であるのに気付く。「峠」は、ひよいとくつつけたようで、それでいて、山山の起伏までがよく分かるような気がする。これが企まぬ技巧というものだろう。

路郎句集「旅人」の最後のページに  
名も知らぬ山の起伏をうれしがり

という句があるが、それと句趣がよく似ている。頂きから見た人里の景色。凧よりも上  
でみる、空間の景色。それは俗界を離れて見る、人間界の姿であつたらう。  
なんとなく、引きよせられる句である。

マダムとも呼ばれて小鳥ほど動き

(花宵)

小鳥はよく動くものである。それも間断なく動いて、飽くことを知らない。文鳥も目じりも、カナリヤも、みな人に愛されていて、鳥籠の中で辛抱している。喫茶店のマダムというものが、一日店内を行ったり、来たり、動き回る動作は、あるいは似ているかも知れない。境過もまた、小鳥に似ているかも知れないのである。作者も、そう観察しているようだ。

病人を見舞う高さに菊匂う

(靈眼子)

この句は、格調の高い句だ。格調の高い句というものは、いろいろあるが、この句の場合、病人。見舞う。菊。という文字が一体となって、「見舞う」という、平凡な事柄を、格調化した観がある。

その素因は、菊にあるか、位置の高さにあるか、または見舞う人の態度にあるのか、凡眼には映りかねるが、すがすがしいのである。恐らく作者の心眼が、句に作用したものであるうか。「菊匂う」が、引立っている。

かぶりついて見たい女の円い膝

(七面山)

この作者の句は、おおむねこの種の、肉感的な句の傾向ではあるが、この句はいい。率直である。エロチックのごとくして、真剣なものがある。誰れしも丸い女の膝には、

魅惑的なものを感じるものだが、かぶりつきたいと、感じる人は、きつと、もり上がった見事な膝がしらに對してだろう。これはいつわらざる感情ではないか。あたかもそれは、あかいリンゴに、かぶりつきたくなるのと、同じ感情ではないだろうか。

### 雑魚ばかり寄つて選挙の酒をのみ

(旭童)

この句からは、「雑魚」の哀愁を感じた。プロ野球と、大相撲。選挙と。これが日本の年中行事と言われるが、それほど選挙はたびたびやっていて、その都度アルバイトが要求される。「雑魚」すなわちアルバイトであろう。この人達は、候補者とはごく短期間のつながりで、しかも期間中は、汗みずくになつて駆け回るのだ。当落にかかわらず一杯出るのであるが、その酒の味は、いろいろな味をもつ。候補者と路で逢つても、顔を覚えてくれているかどうか、わからないのだ。思いきり、ご馳走にありつくにちがいない。みなパンに繋がっているのをしみじみ感じる。

### 笑つてるのは高座の二人だけ

(一三夫)

この句も哀愁を感じるではないか。漫才が高座で、お客を笑わせるのは、並々

の芸ではなく、特別な才能がいるのだが、お客がついて来る場合と、来ない場合があり、それはお客の虫の居所次第ということになる。

下手に笑つて見せても、肝心のお客が笑わないことには、引つ込みがつかない。明日の高座までは、飯のどへ通らないものだ。この漫才さんは、へたの部類だろう。こんな人達は、修業をつみ直すしかないと聞く。お客もそうそうは、馬鹿でない。

### じつとしておれぬ年寄にも困り

(十九平)

この年寄りはよく気のつく人に違いない。人が来ると言えば、先き回りしてあれこれと指図をする。お茶道具を用意するというように、万事ぬかりがない。よろこばれていいはずのものも、うるさくられる。

年寄りにも、損をする人と、得をする人があるのは面白い。世間はそうしたものだ。この句は、そうしたことを暗示して、主人側の気持ち代弁したところが、老練。

### 気の早いとこがかわいい落のとう

(遠二)

この句は、都会の人には分からない句だ。太閤記に、筑前の守に任官した秀吉をむかえる母親が、雪のつもった庭土を掻き分けて、落のとうを探す場面があるが雪のふる中にも芽を出す植物は珍らしい。年寄りはうっかり見おとす落のとうを見つけ出すものだ。

昔恋しい年寄りの心境には、どこかしらゆとりがあることを思わせる句。

### 雑草よこしもやるか根くらべ

(東雲楼)

雑草をとる仕事は、庭師にやらせる。簡単なようだが、これを根からぬくには、手際わがある。素人がやると、すぐ生えてくる。広い庭園では、取り終わらないうちに、もう生えてくる。二回、三回と雑草をぬく。これは、園主と、雑草の根くらべである。

雑草の生命力のつよいことを知ると共に、人生は至る所に転がっているのを、悟らしめるではないか。

### ヒヨコの雄がこんなに安いとはシヨック

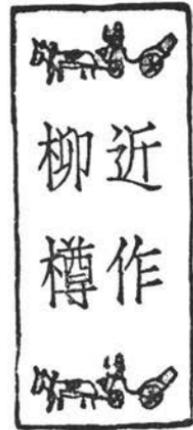
(史好)

ヒヨコだけではない。人間も雄は、安くなるかもしれない。ちよつとしたシヨックを、面白く詠みこなした手腕を賣う。売られてゆくヒヨコにも、哀れみがこもる。「ヒヨコの雄」以下一気呵成に、シヨック。と何かを掴んだ感じ。おもしろい。

### 春が来る雨音を聞く日曜日

(春巳)

うとうとして、ぼっかり目をあいたような句。三月の声を聞くと、日曜ごとが待たれるが、寒かったり、ぬくかったりで、ちよつとも落ちつかない。それでも周囲の物音は、もう春が来たことをささやいているようだ。しかし雨では仕方がない。今日は籠るとしようか。そう思つて聞く、雨の音は悪くない。



北川春巢選

奈良市 村上春巳

一家総出一年生が家を出る

奥さんは病気ですかと負けてくれ

親父の目そうかそうかと信じてず

親鹿の通りに小鹿頭下げ

奈良に住み奈良の人の出を見るテレビ

出雲市 竹内李朋

明治風物詩

鹿鳴館踊る公侯伯子男

新橋の汽笛は夢の超特急

燃ゆる恋海老茶の袴ゲートの詩

しんこ飴明治の夢を脹ませ

肉弾を日本人の血で綴り

仙台市 平野光道

庭に梅咲かせ百姓ビルの陰

子を抱いて女混浴に割つて入り

買いためた酒減つてゆく花曇  
花の雨職員用トイレ酒くさく

尼崎市 中溪慶彦

日給に直せば食えるのが不思議

借りる気があれば着られる子の背広

医者よりも自己診断は酒の味

さて何処にしよう大阪は食いだおれ

愛知県 槇紫光

二日酔よわせた人が見舞いに來

物云えば子に小遣いをせびられる

空気にも風にも味がある詩人

新潟県 高野不二

小言幸兵衛女房のいない日は静か

理想境四年に一度聞くばかり

温泉へわざわざ泊り酒で明け

鳥取市 近藤秋星

政治には疎く一票又よろけ  
処女の日の最後の桜やも知らず  
満開を待つてたような春嵐

大阪府 井上 美恵子

五十代を老婆と書いて記者若し  
好きな人ないのと好きな人が聞く  
財産があつて善意へ気を廻し

大阪市 和田 痴亭

さくさくと逢いにゆく日の服地裁ち  
六十の花見冬服毛メリヤス  
盆栽の新芽労わるよい老後

松原市 谷 垣 史 好

ミニスカートカメラは舐めるように撮り

妹結婚(二句)

色直し花嫁半分ほど素顔

ハネムーンなんで万歳するんやろ

尼崎市 平 井 露 芳

スモッグへ自衛と鼻毛延びてくれ

教養が邪魔で栄養身につかず

弟川重就職

歯車にされて職人宙に浮き

八幡浜市 別 宮 すすき

ベースアップの金が学費となつて消え

賃上げの時だけ労組団結し  
退職金もらい借家にさようなら

伊丹市 貴 志 千 尋

靴ずれに例えて歯科医妥協せず  
体操のリズムに手足追いつけず  
美しい嘘も平気でいえる恋

西宮市 佐々木 玩 柳

老将も部下に雇われ雑役夫  
顔ぶれを打診してから額を決め  
地位を得た頃糟糠の妻は亡く

大阪市 田 島 英 夫

もらい得ゴネ得金がかたきなり  
パパ抜きにそなえて妻は職をもつ  
帯ボンとたたけば夜の顔になる

岡山市 行 吉 照 路

忙がしい会社で牌のたこ作り  
息子のお古でパパがめかしこみ  
雨降れば昼寝も出来ぬ日曜日

米子市 八 木 千 代

大学に入れて炬燵の広すぎる  
案外な場所で次男の顔が利き  
貯めてから厄年などが気にかかり

広島県 岩 谷 二三枝

反省のどこかで邪魔する自尊心

愚痴きくも商売のうちと我慢する

おのろけをぎょうさん聞かされ払わされ

大阪市 小 谷 葉 子

偽りの甘言と知る曼珠沙華

倦怠が素通り永遠の愛よ

粉な雪を総身に受け別れけり

岡山県 瀬 戸 山 文 平

ソロバンの得意な娘まだ嫁かず

多忙な日続いて日曜早う来る

八尾市 宮 西 弥 生

八方美人になつて多忙つきまとい

気苦労を見せない嫁で肩こらし

姫路市 前 田 芙 巳 代

逆縁は哀し天寿さからえず

慰める涙にも女ポーズする

姫路市 大 久 保 大 夢 子

カルピスと梅酒と老の夜は長し

喜寿の肺断層写真とつたとて

桜井市 岩 本 雀 踊 子

ガス水道だと道をとうせんぼ

喜こんでくれる小さな嘘をつき

愛媛県 関 本 柳 剛

春潮の無明の底は澄むばかり

嫌い抜く為に病衣を白く着る

河内長野市 森 本 黒 天 子

恩は恩借りの金には利子がつき

法事に招かる

今更に長生きしてるのに気づき

鳥取県 鈴 木 村 諷 子

このバスを春着の女春にする

口だけの親孝行もようせず

鳥根県 小 砂 白 汀

進学ははしやぎ就職泣く車窓

転動を送る手ドライな春の風

宇部市 櫛 部 い さ 夢

じやまになる小銭はガムを買つておく

団体の靴は磨かず並べられ

広島県 南 条 露 声

花見雨やれ儲かつた儲かつた

いい嫁が来て姑の室替り

名古屋 花 東 千 久 良

阿呆の日々べらべらめくる古日記

双葉から塗る顔だちに育ぐくまれ

竹原市 小 島 蘭 幸

働いた金だパチンコなど止そう

四月馬鹿騙してくれる人もなく

米子市 林 瑞 枝

内職の花に埋もれて坐り詰め

終電車化粧も御用済みの顔  
地価騰貴四角四面の家がふえ

羽曳野市 菊 地 茶 坊

売り物と思えば百姓娘にさせず

島根県 堀 江 正 朗

満開を見えるふりして僕もほめ

正論が通らず結局酒になり  
ハネムーン敷かれ初めの抱持ち

高知市 永 野 舞 子

顔で見る手で見る春の楽しくて

大阪市 江 城 功 雄

さよならの余韻逢える日へ温くめ

病院を変れば診断又違い  
団らんのテレビへ無惨な事故ニュース

大阪市 吉 居 奈 々

散る桜つらく見下ろす人生譜

大阪市 池 田 豊 平 次

マネキンの着ていた服の寸直し

チヨン髷とジャズがチャネル奪い合う  
麦の穂も生花となり弗かせぎ

貝塚市 行 天 千 代

童顔に容赦もなしに白髪ふえ

竹原市 三 宅 不 朽

春愁の花弁づたいに夕日落つ

潮の岬成程海が丸く見え  
女の子を上手に遊ばすのも幹事

大阪市 西 本 保 夫

家中が膝うつプランに金がない

広島市 上 代 美 文

未成熟な脚線へ膝上十センチ

十万円セコでも買わんカーブーム  
少しならと医者が許せば酔いつぶれ

高知県 山 川 勝 子

コマーシャルのように候補者のマイク

竹原市 出 島 静 波

段取りも良く世話役は酒が好き

結婚十二年  
この嘘は後悔しない妻の前  
台本のない僕達のプラトラブ

大阪市 奥 川 継 之 助

どぶ川のぶつぶつ吹いている邪恋

守口市 田 中 笑 風

本家さん分家の数で当選し

タバコ屋が移転ポストもついて行き

七尾市 松 高 秀 峰

市長選当落酒の肴にし

人生に卒業はなし経を読み

出雲市 森 山 健 太 郎

牙むいて待つ東京にあこがれて

新築の図面うれしい内輪もめ

大阪市 藤 田 頂 留 子

女ばかりの行楽会

食うだけじや高が知れてる女連れ

小寸を探がすドテラに一とさわぎ

諫早市 原 田 明 春

良縁は娘ども口説に骨がおれ

先輩はカウンタアだけ顔がきき

尼崎市 後 岡 と し み

聖人になつた気で説く色の道

笑つてはおれないものに針の穴

尼崎市 中 谷 利 美

仲居さん来てからすき焼らしくなり

すぐ顔に出す女房で御しやすい

鳥取市 小 林 由 多 香

伸ばしたい才能金に阻まれる

塗り替えただけで拝観料値上げ

羽曳野市 麻 野 幽 玄

お目当があるから小言聞いておき

義弟愛児死去

浄土への紫煙は無限の空に消え

大阪市 小 東 琴 女

入れ知恵をしてから尻をつついとき

新婚へ気を利かしたが気にかかり

千葉県 鳥 飼 春 泥

敗戦の頃知らぬ娘が瘦せたがり

感情の動物今日はよく喋り

高槻市 山 田 ス ミ 子

わら灰の要らぬアパート住いする

立話背の子供は泣いたまま

大阪市 半 田 夏 生

江の島の冬は波風立つばかり

島根県 堀 江 芳 子

花見客去んで女はなおせわし

島根県 石 田 清 泉

禁煙の誓いは酒に破られる

四国八十八カ所願拜

念仏にかえて歌謡を口ずさむ

引退をして人生もちと変り

年度末他人の人事に憤慨し

着ぶくれて女に春の遠くなり

ウインドから踊り出たよな一年生

社会科の先生社会の風うとし

やりくりの悩みは義理を一つ欠き

乗り越して思わぬ旅情満喫し

まあ一度行つてみるわと妹嫁ぐ

停年で旧県道を行く心地

北九州市 藤 田 独 楽

大洲市 堀 内 曉 風

羽咋市 三 宅 ろ 亭

高知市 田 内 文 子

大田市 藤 田 軒 太 楼

島根県 大 森 孝 華

北九州市 三 上 春 雄

出雲市 王 紫

大阪市 梅 園 摩 耶

笠岡市 高 木 渋 柿

広島県 高 橋 鬼 焼

妹も年頃兄を批判する

春うらら花見と無縁の職を持ち

ペンキ屋は鼻歌まじりで塗りまくり

酔う癖に菜たよりに又旅行

チンパンジー拍手を馴れた顔で受け

煙草錢ほどの恩給喫みもせず

デパートの包装風呂敷しまつとく

大事件酒でもみ消す腕つ節

散るまでに花見に行くと言うただけ

お揃いですがなどと女中催促し

軍資金なければ愛もついてこず

札幌市 河 本 雪 男

三次市 和 泉 松 風

笠岡市 谷 本 鈍 愚 坊

竹原市 時 広 一 路

笠岡市 高 木 久 江

竜野市 森 下 峰 子

八代市 永 田 松 雄

岡山県 内 海 碧 人

堺市 斎 藤 亜 也

愛媛県 磴 本 満 子

鳥取市 北 野 天 人

誘われた釣やみつきになり一人ゆく

松江市 錦 織 陽 子

退院の友に痛いほど拍手する

諫早市 前 田 つとむ

宇宙服月へ飛び立つ日を選び

高知県 岡 本 香 芳

脳髓をしびらせ走る救急車

大阪市 武 居 寿 美 司

民謡のバツクは郷土のおどりの輪

京都府 菊 沢 破 天

生きているうちの孝行へよく泣かし

鳥取市 藤 本 佳 女

長靴の母が杖とも柱とも

鳥取市 河 口 忠 志

落ちた子が親をなだめる不合格

鳥取市 藤 本 鎮 也

百年の老舗ボロ口真にうけず

鳥取市 藤 本 征 也

副業の伯母のスタンド頼りにし

鳥取市 藤 本 和 宏

ボデイビルのつもりで働らくお手伝い

鳥取市 藤 本 恵 子

ぬけぬけと云う嘘だのに涙が出

鳥取市 谷 尾 虚 風

隣室の耳を忘れた仲の良さ

鳥取市 山 本 正 子

卒業を親がするよな顔で来る

普通寺市 伊 藤 歌 子

終盤戦連呼の声も泣きおとし

北九州市 大 沢 一 三 朗

宴会に上戸は上戸の横に坐し

泉佐野市 大 工 チ ヨ

パーマ屋の手よりも口が好く動き

泉佐野市 大 工 静 子

年老いて童心に戻り旅の空

大阪市 宮 本 地 楽

分別の盛りへ停年容赦せず

タチカワペン

優雅な書き味

TACHIKAWA

告

社

### 近作柳樽の優秀句へ「川柳塔賞」設定

昨年十月から本年九月号までに発表された「近作柳樽」の優秀句へ、本年度から新しく「川柳塔賞」を贈ることになりました。発表は同人吟の「路郎賞」と共に十月号でその栄与を表彰します。

選考委員は雑詠選者のほか数氏の参加が予定されているが、詳細は次号で発表します。(川柳塔社同人はみとめません。)

川柳塔社

### 忠臣蔵私感

吉田 水車

昭和二十年八月終戦勿々の折、たまたま名古屋に來られたハワイウイロー社の古川麗花氏に面接の機会を得たのを記念して氏がわざわざ署名されて「川柳忠臣蔵」を贈られた遠くハワイの地で上梓されたこのような立派な柳書を拝見してその熱情的企てに感激したものである。同時にこの一書に込める意味と感謝の念からまことに遅まきながら「忠臣蔵一件」について少しく記してみた次第である。

史家にとってこれくらい古くして新しい問題の一つであるものはあるまい、というのは「赤穂義士に關した図書目録」だけでも二三六ページの本が出され、また劇化された上演

題目だけでも六五種以上に及んでいる、その他浪曲講談に至っては枚挙にいとまがないことからしても察しがつくからである。

そもそも殿中刃傷と義士の仇討の事實は事實としてそれ故にその発端の元禄十四年三月十四日に起こった殿中刃傷のよつて來たことわけがあいまいである点史家を悩ますこととなる。

忠臣蔵の眼目は第一殿中刃傷にあるこのために一年有半浪々の身ながら初一念を全うした四十七士を賞め、かつ同情したことから起きた、いわば判官びいきの諸々の著作劇作がおびただしい数にのぼったのである、真相のあいまいというのは史家の掘った当事者の書き残した多くの記録がどうしても筆者の主観的なものである故に百パーセント受け入れないために史学的究明に當って「どうも判りかねる」ということになっているようである。

### 川柳塔社常任理事会

飛び石連休にはさまたつた五月四日六時からホームグラウンドでナイター理事会である。

最近の同人吟に詩の香りがうすれているのではないか、という発言があった。最近メキメキ「近作柳樽」の作家が頭角をあらわしてきたので、これらの作家にも、柳道発展のため「川柳塔賞」を設けてはという声があつた。「川柳塔賞」には全員賛意、この十月号にその栄光の句を発表することに決定した。

路郎忌句会は別掲参照。七月九日(日)一時から自安寺。閉会後喜楽別館で晚餐会。出席―多久志・小松園・静馬・好郎・梅里・葉・文秋・生々庵・白柳・古方・一三夫諸氏。

茶  
グリル・ラウンジ  
パーティ・ラウンジ  
展示会場



喫茶・グリル・ラウンジ  
**御門**  
GYOMON  
心齋橋大丸・そごう東入る  
TEL 271-6684

# 明智光秀 (中)

## 富士野鞍馬

うのは相性はよく、このコンビは幸運といひ  
伝えられているのに、本能寺の変となった。  
それをまた川柳は

七ツ目も当てにはならぬ本能寺 (二〇九)  
悪いおん夢七ツ目に巢をくはれ (安六義三)

ちくしやうめなどと鼠を馬はいひ (寛元宮二)

丹波の鼠京へ出て馬をくい (一九三)

手飼の鼠手をくつた本能寺 (一六二)

十兵衛が馬をのんだは本能寺 (四五三)

とその子年と午年とを詠んでいる。  
本能寺安田は玉に疵をつけ (六三三)

蘭丸が突留にする二分一本 (一三三)

蘭丸をいつち惜がる本能寺 (八二〇)

明智方の勇士安田作兵衛は、信長の近習森  
蘭丸と一騎打して、高縁から突落され、翠丸  
を槍で突かれたが、その槍にすがって飛び上  
り、蘭丸を討ち取ったというのである。「突  
留」というのは富突になぞらえていいる。

丹波のとのむほんだど京さわぐ (一五九)

本能寺じやといのと涼み大みだれ (傍三二)

ただすの涼み十兵衛で大騒ぎ (傍三二)

と京都市中は大騒ぎであったであらう。 (三二一)

いい寺を一度明智はしてもらひ (傍三三)

寺をしてもらつて明智又とられ (一一一)

と本能寺を賭博のテラに見立てている。

六月二日いい気味と門徒いひ (七一三)

石山本願寺を追払つた信長に対し、門徒の

## 本能寺の変

丹波亀山に帰つた光秀は、中国征伐の勢揃  
いといつて、丹波、近江の軍勢一万七百人を召  
集し、六月一日、従弟の明智光春及び齋藤利  
三等五人の股肱に、信長を討つ決心をあかし  
同意を得て、表面は中国へ出征すると称して  
兵を發し、大江山を越えて老坂に来た。中国  
へ向うのならばここから西へまがるのであるが  
東へ向つて隊を進め、桂川を渡つてから「我  
が敵は本能寺に在り」と揚言したのであつた。  
六月二日の未明、京都に入り、一万七百人の  
光秀軍は、信長が駐在する油小路六角の本能  
寺を襲撃した。

正子の刻に本能寺へ押よせ (コリ三九)  
あきらかな智慧に信長たばかられ (一四三)

此度は主といわせぬ本能寺 (六五七)

得がたきはときと本能寺へしかけ (二六三)

土岐のかね寝耳へひびく本能寺 (六四八)  
明智勢織田の寝耳へ水浅黄 (八七二)  
時ならぬ桔梗が咲いた本能寺 (七八三)  
本能寺寝耳にときの声がする (三三四)

光秀の本姓は土岐であるので、それにか  
けて川柳に詠まれている。桔梗は光秀の家紋で  
ある。また、

本能寺すてつべんから王手なり (草の実初)

駒組もせぬに王手は本能寺 (三九三)

本能寺はしの歩をつくひまはなし (三二五)

と、将棋にたとえた句もある。

その時信長は寢室に居たが、自ら弓をとつ  
て戦い、蘭丸等の近習も奮戦したが、遂に火  
をつけて自殺した。あとで信長の首をさがし  
たが見つからなかつた。

光秀はその時五十五歳年生れ、信長は四  
十九歳年年生れで、その十二支の七ツ目とい

感情をも詠み、

本能寺安土の意趣で高みで見 (拾五25)

安土で、日蓮、浄土の宗論に、信長は日蓮宗を負けたので、日蓮宗である本能寺は焼かれても、これもいい気味だと思つたかも知れない。

### 三日 天下

天正十年(一五八二)六月二日、本能寺を攻めて信長を亡ぼした明智日向守光秀は、直ちに京都を治め、天下の權を握る威風を示し窮民をあわれみ、課税を免じ、仁政を施した。そして惟任將軍と稱した。

洛中は光秀信士とほす也 (二〇14)

三日咲桔梗を譽る京の町 (七四15)

今以て三日にあげず京でほめ (一九14)

ねずみかたらに三日なる本能寺 (安八礼6)

五ツ月も取りそくな句で三日取り (舊初37)

明智軍配へでんぼうの地誌ゆるし (二六24)

是からはおれがすきだと三日いひ (一四16)

元ト人ものだと明智へらず口 (七〇29)

洛中へ慈悲は三日の口塞ぎ (二二39)

三日でもとられぬものを明智とり (一四22)

洛中に桔梗の花が三日咲き (二二36)

臯月かなやふやふ天氣三日持ち (六五12)

時は雨居続三日むほん也 (五四10)

京染にしても桔梗ぢきにさめ (二八29)

三日正月を丹波の庄屋触れ (二〇3)

などと多くの川柳にも詠まれ、その期間がまことに短く、十日後の十三日には、光秀が山崎で秀吉に敗れ、小栗栖で殺されたのである。この短期間でも天下をとつたのを「三日天下」といわれているのである。

それで、十日後に亡びたのであるが三日で亡びたように川柳に作られている。

三日ころりの討死は明智也 (七八13)

樞花より桔梗は二日よけい也 (四九37)

三日草ともいそふな桔梗 (七五10)

三日目は日篇に月の智でも闇 (六九4)

明智へでんぼう三日は天下なし (二〇七33)

四日とはたち廻らせぬ主の罰 (一三28)

光秀が得たは三日の天の時 (四九37)

時あり三日日向をてらす也 (三四29)

資本の明智軍記も三日限 (九七20)

本能寺三日あはぬがふうんなり (七一)

桔梗をば三日程にて染てやり (一九24)

骨折も三日坊主は本能寺 (六〇2)

御手附ケも三日古着の桔梗染 (一一〇32)

桔梗袋に三日とは持たぬ銭 (一一〇34)

明らかな智恵でもたつた三日也 (一一13)

中指を折ると明智はしてやられ (五九12)

四日目は明智日蔭の守となり (五四38)

十兵衛は日向へたつた三日出る (一一33)

四日目は光秀猿に引ツかかれ (安六正25)

五月雨を三日照らすはとき明り (一五七十五30)

四日とは天気も持たぬ五月雨 (三九21五二11)

三日程でらてらとする五月雨 (二三33)

愛宕にて買ったさつきは三日咲き (六28)

四日目に愛宕の額を引つぱづし (三八6)

等と「三日天下」に興味をもって、いろいろに多くの川柳狂句が作られている。

#### ★ 同人 消息

▼若林草右氏(大阪逋信病院川柳会)は天皇誕生日に「勲三等旭日中綬章」の授賞伝達があり、五月十日上京、郵政大臣から勲章と勲記を受けられた。皇居において天皇陛下に拝謁し、逋信関係叙勲者を代表してあいさつをされた。多年にわたる逋信従業員の健康維持と医学界の発展に尽した功績によるものである。お祝い申しあげます。

## 川柳手拭い

子 沢 山

僕のまぐらは

何処へいた

(路郎)

送料共

百二十五円



## 一か一な一が一き一

### 戸田古方

地下鉄の車内広告に、大きく片仮名の横書きで「キンシド」というのがありました。はじめ「キドシド」とうっかり読んで、何のこ

とやらよくわかりませんでした。じっと見てみると、すぐ「キンシド」だとわかりました。が、わかっただけでも「キンシド」と読んだら大阪弁の「気兼ね」の意味にもなるなあと思えました。字づらはもっさりしてくるけれど「キンシドウ」と「ウ」の字が入ってはいればこんな読み違いはしないですんだかもしれません。

こうした「ウ」を入れないためにへんになる例に「イトマン」がありました。本町の御堂筋の角にある伊藤萬株式会社のことです。いつでしたか「イトマン」と書いてありますので、誰かが沖繩の糸満と思いを違いましたことがあります。

ガリソンというアメリカ人の名をガリソンと読みたくなったり、ゼイキンと書いてある

のがキンゼイ報告のキンゼイに見えて仕方がなかったりしたものでありました。

片仮名の横書にはことに読み損いをするものが多いいのですが、縦書のときにも、平仮名にもないわけではありません。

日本人は物真似がうまいといいますが、し地味ではあります。創造はしてありません。片仮名、平仮名の発明もその一つです。エジプトの象形文字をフェニキア人が便利なる音標文字にかえて、それがギリシア文字、ローマ文字と、今日のアルファベットになったといわれています。このアルファベットが世界中で使われているほど、日本の仮名には世界性がありません。日本語を使う人にか仮名が通じませんので、あえて地味だといったのであります。しかし、考え方によって仮名はアルファベットと同じく大発明であります。

正式に漢字が日本に伝わったのは、中国で

は漢の時代、朝鮮半島の百濟からでありました。五世紀のことです。王仁が論語、千字文をもたらしたといわれていますが、日本人が漢字を見たのはもっと古いのではないかと思われれます。いづれにしても、言葉はあっても文字を持っていない日本人が、その頃から漢字を借りて音をつしはじめる万葉仮名というものであります。漢字は一字ずつ意味をもってありますが、音だけ借りた日本人は随分でたらめな使い方をしました。「銀母」とかいて「しろがねも」と読ませたりしたものです。「母」はハハの意味ではなく、「も」という音のために使ったのにすぎません。伝統などにとらわれない融通無碍なところは新興階級の活気に似たものが感じられます。

平仮名は漢字の草書体から、片仮名は漢字の一部をそのままとって立派に音標文字に仕立てたのであります。日本人は仮名のお陰で、比較的早くから文字が読め、文字が書けたようでした。ことに江戸時代になりますと寺小屋が普及して、読み書き算盤と文盲退治が進んで明治に入ることができました。これは後進国日本が僅か百年にここまで成長して来た大きな理由であります。

しかし、長所は短所、誤ちの原因にもなっているのであります。漢字なら少々字画に間

違いがあっても、格好を見ただけで意味を取り違える心配は少ないのでしようが、仮名は自身意味をもっていませんので、一字のちがいが大きな誤りを犯させるかもしれません。心しなければなりません。

川柳作句に際し一字のテニヲハのために長い時間をかけて推敲するのもそのためです。また、名詞を漢字で書かず仮名にしたために「はな」が「花」になったり、「鼻」になったり、「端」になったりし兼ねません。

川柳は時としては漢字ばかりの句「一步一步一歩一歩二万二千尺」といったようなものもありますが、多くは仮名の交ったもの、仮名の分量の多いのが普通であります。ことに近頃は

送り仮名に自信がないので、全部仮名書きにするのが目立ちます。

川柳は俳句とともに世界最短の詩型です。そこで表現を試みるためには一音、一字といえどもゆるがせにはできません。読み違えてもされたら味も何も飛んでしまいます。用語

の選択、仮名と漢字の配置や分量の比率にはことに気をくばる必要にせまられるのです。

漢字ばかりの川柳は至って稀れですが、仮名ばかりの句はよくお目にかかります。仮名の分量を多くするほど、句が柔くなり、親しみも増しますが、あまり濫用しない方がよさそうです。普通は二、三字ぐらいの漢字のある方が読み易く、意味も取り易いものです。

漢字と仮名の配置の仕方ではリズムを感じとらせることも出来ます。例えば上五を漢字、中七を仮名、下五を漢字交りにしたりしてみますと、耳のリズムの外に目にリズムを感じられもします。

俳句は視覚的と申しますか、凝った漢字を使ったりしますが、川柳では簡単に辞典が引けないようなむずかしい字を使う必要はありません。仮名で十分です。もし視覚というよきなことをいうなら、今いった漢字との組合せの工夫や、意味のない音標文字の仮名の魂を吹きこんで、目で見て心よいならべ方を考えるところにあるのではないかと思うのです。ここにこそ、庶民詩としての川柳の醍醐味が生れてくるのでしよう。

## 近 詠

咳一つ課長はたばこのまぬなり  
恩給の二人は今日も留守になり  
座布団をふまいて老人こけかかり

須坂市 高峰 柳 児

リングまだ歯にしむ信濃路遅い春  
遺産売りつくして故郷の風きびし  
賢妻で敷居を高くして構え

大阪市 橋 本 緑 雨

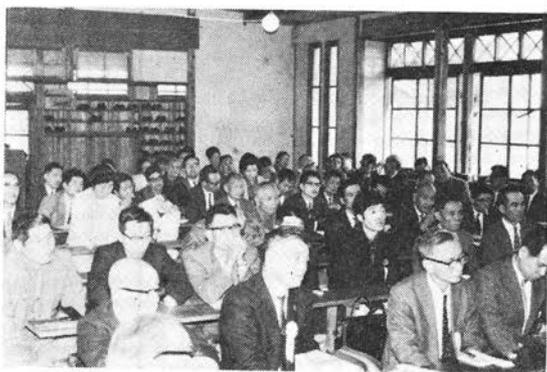
いつも新しく美しくお買物が  
楽しめる近鉄百貨店!



10時～6時・木曜定休

アベノ・上六  
近鉄

アベノ621-1231・上六771-3331



柳人83名をうづめた会場

四月になってから雨の日が多い、いわゆるなたね梅雨のおかげで記念大会当日の天候が危ぶまれていたが二十日ごろから青空を見せはじめたお天気が大会当日は雲ひとつない、この春最高の絶好日和に晴れ上がった。

きょうは備前川柳社が昭和二十一年に誕生してから昭和二十四年に川維備前支部となり四十年支部を解消して元の備前川柳社となった通算二十周年を記念する大会当日である。町当局や事業所団体も応援に本腰を入れてく

## 備前川柳社二十周年記念大会記

れて駅前には「吉永町文化川柳大会歓迎」の横幕、そして会場の公会堂までの道筋に当る各戸には「祝吉永町文化川柳大会」のふちを赤で色どった掲示が春風に一層の色彩を添えている。

開会時刻の十二時前には既に参加して来た西日本各地からの顔々々、なつかしい顔、久しぶりの顔、珍しい顔、大会のふん囲気はいやが上にも横溢して来た。曰く大阪、西宮、尼崎、明石、姫路、相生、出雲市、竹原、広島、下関、そして岡山の各地からである。

兼題、席題の締切が予定どおりすんで記念撮影である。出席者八十三名、投句者三十五名であるから、ちっぼけな公会堂では横に二十名を四段に分けてまだすこし残る始末で写真屋が汗をかきかき、まごつくことしきり。

終わって開会の挨拶であるが、これも浜田久米雄が四、五日前からの風邪でのを痛めてしやがれ声のため本人は必死であるが聞きとれにくいことおびただしい。町教育長の祝辞、祝電の披露があつて、兼題の披露にうつつ

て行った。

途中披露の最中に加藤岡山県知事がライオンクラブの結成式に出席して、この会がいま開催中と聞き敬意を表しに玄関まで来られたのである。ところが大会は披露の最中で、このムードをこわしてはいけないという知事の思いやりもあり、行程の都合もあつて応待に出た久米雄に「ご出席の皆様によるしくお伝え願いたい。備前川柳社の今後の発展を祈る」旨の伝言があつた。披露の切れ目で司会者から参会者へ知事の気持を伝えるというひとこまもあつたのである。

兼題、席題を通じ三光には選者の色紙または短冊と別に副賞は題の披露がすむと入賞者に配られつつ、順調に進んで予定どおり午後四時二十分終了、横山一声の閉会の辞によりひとまず大会は終わった。引き続き希望者による懇親会がその会場で催され集まるもの四十名、各地代表からの祝辞や激励の言葉、初対面ながら川柳でなくては見られぬ柳魂の交換がくりひろげられた。午後六時半吉永駅を

上る組と下る組、そして見送る地元の組との間に尽きぬ握手の別れがくり抜かれたのであった。

備前川柳社が生まれて二十年、その間十六年間は路郎先生の「ご指導のもとに精進にこれ努めて来た。毎月一回の例会、そして十周年大会、十五周年大会、路郎師第四句碑の建立、会員句集「竜泉」の二回発行とつづけてきた思い出は尽きないが、四十一年十月には町内三十数カ所に交通事故防止川柳標柱、七カ所の山陽線踏切に踏切事故防止川柳標柱を建立して川柳の社会化に乗り出せる体制を整えている現状である。川柳の道は永遠であり備前川柳社の前途なお遠し。二十周年大会を終えて感慨ひとしおのものがある。

(浜田久米雄記)

兼、席題の三光句のみ抜萃

席題「口」

山内静水選

何か氣にさわつたらしい口を閉じ  
口もとにはえが止まつて子の昼寝  
口もとがほころび表彰台の人

席題「花」

中村九呂平選

花活ける男の指がきれいすぎ  
病むベツト花の命を見届ける  
花活けておんな邪心をしずめる日

席題「雨」

松村万古選

雨の日の話題を地球の外に置く  
選挙より雨が気になる観光地  
邪魔になる雨ベトナムへ行つてくれ

兼題「胸」

浜田久米雄選

はつたりがないから胸を打つ弔辞  
胸に手を当てて女は悔いがない  
妻だけの胸にしまつているカルテ

兼題「艶」

直原七面山選

ホルモンがしたたるような肌の艶  
顔の艶まだ色欲を捨てきれず  
声高き女同士の艶話

兼題「山彦」

服部十九平選

さよならを山彦にして山が好き  
山彦へ熊の親子は道を交え  
山彦がおそく戻つておもしろし

兼題「リボン」

石井伯峯選

スピッツの不満リボンを噛んでいる  
黒枠のリボンへ風も立ち止り  
感傷もよく内職のリボン裁る

兼題「友だち」

尼緑之助選

配分となり友達の間ではない  
友達の間で財布をこぼし飲み飲み  
家計簿に大穴あけて友が去に

兼題「誠意」

梶川蘇堂選

旅先の誠意に声の欄で謝し  
募金箱誠意を入れて春うらら  
さりげない仕ぐさに誠意満ちあふれ

兼題「握手」

清水白柳選

関取りと握手僕の手見失い  
切実な恋は握手をせず別れ  
善人をまる出しにしてする握手

詠

近

今治市 長野文庫

安閑としていて濁る溜り水

ママ若く子はカロリィで育てられ

犬はよく知つてる吝な勝手口

今治市 月原宵明

よう書いているので額の字が読めず

理由とは別に肉體熟れてくる

金持つて終日吠える犬を飼い

大洲市 米沢暁明

ほんのりと妻を匂わす宿の朝

辞めぎわのきれいな男拾われる

新聞はここへはさめと戸の隙き間

和歌山市 秋月宏方

神さまのえこひいきです運不運

中古の人間寄せて小企業

好きな句の作者に逢つて話したく

# 初歩教室

題——「鍵」

## 菊沢小松園

一見して堅い真面目な題である。作り難いと言われてこられたのも、例月の通りであつて、どんな課題でも作り易い題なんかおおよそ少ないものである。要は人それぞれの受取り方である。作りよいと思つた課題に良い句が少なくかえつて難課題だと思つて苦しんだ句に、応々、佳句を得ることがあるのも皮肉なものである。これは課題に対しての取組方、心構えの問題なのであろう。

日曜日鍵ツ子母へまといつき  
口ツカ一の鍵完全に去に仕度  
めずらしく早く帰れば鍵かかり 一 扇  
どるほうには入られてから鍵をかけ 同  
鍵二つ夫と妻の曲りよう 初 甫  
鍵かけてわが世の春と一人居る 同  
第一句、たまの休日、母不在の平素のくらしから解放されて、母を離れぬ子供の姿も、あわれに鍵ツ子の心理もよく出ている。  
第二句、中七の妙味に生きた、帰る支度を完全にとは面白い。第三句、久し振りに早く帰ればなんのことみんな留守、がっかりしている顔も見えるよう。第四句、後手に回るは

人の世の常、よく人情の機微を画いた。第五句、鍵の曲り癖にも、夫婦の違つた個性味、面白い見付けどころ。第六句、一人住いの氣楽さ悠々自適へ春もたけなわか、  
氣休めの小さな鍵に救われる

南京鍵留守を知らせるように垂れ  
共稼ぎ祈りを込めて鍵をかけ 同 秋 月  
鍵もなく一人住いの戸を締める 微 也  
へこおひへ鍵しつかりと結びつけ 同

第一句、人間万事氣休めばかり、釘一本で開く鍵でも、氣休め程度の安心感はある。第二句、防犯宣伝になる川柳、よく言われている事ながら句になるとまた興味がある。第三句、今日一日無事この家を護り給えと祈りを込めて鍵をかける共稼ぎの真面目なすがた。第四句、これはまた反対に一人住いの氣楽さは、鍵なんか必要なく、天下ご免の戸をしめただけ。第五句、帯へ鍵は昔の常套手段であるが、この人物は判る、しかし平凡。しっかの表現でやや救われても句境は浅い。  
押売りへ団地は鍵の固いとこ 孚 彦  
招んどいて鍵掛けたままみんな留守 八 郎

鍵を置くところもきめて共稼ぎ  
鍵穴も覗いて留守をあきらめる 同 要 次  
神棚にかくした鍵を置きわすれ 同 千 梢

第一句、団地の用心深さは押売へもなかなか心を許さない。下五の簡潔に救われた。第二句、招かれて行つたのに、みんな留守、この人が日を間違えていたのならもつと面白い。第三句、人の氣付かぬところへ鍵の隠し場所を決めた共稼ぎの用心の智慧。第四句留守だと判つていてもそこは人間、鍵穴からも中を覗いて、やつと諦める、下五が引しめた。第五句、とっさの隠し場所としての神棚そこへ大事な鍵を忘れた人間の勝手さを神様も苦笑されたことだろう。

ライオンも小さな鍵でへだてられ  
鍵穴の視界で今日も人を見る 同 千 梢  
鍵束へ夜警の歩巾確かなり 同 芙 巳 代  
鍵を持つ妻は一足先き帰えり 同 寿 美 司  
鍵ツ子の鍵ツ子同士うまが合い 同

第一句、百獣の王も人間の智慧の前には小さな鍵の掛つた柵に互いの間を距てられている。鍵というものの用法の広さを示している。第二句、針の穴から天を覗くの亜流、限界の極地から今日の人生は判らない、況んや明日の人生は。第三句、こままでなると夜警もベテラン、足幅が揃うようになつて人生も落付くか。第四句、世帯持ちの女は神経の行き届くもの、かくてこの家庭も今日無事暮れる。第五句、あわれ鍵ツ子、宿命の二人はまだ幼なく自分たちの家庭の人情の暗さに気付かず、至極円満に睡じい。



信 号

関戸 宗太郎 選

信号の変わりきるまで待ち切れず  
 信号は赤でも走る酔つばらい  
 年寄の足に信号二度変り  
 髪染めて赤信号の未亡人  
 信号を受けて駅長上着きる  
 青信号待つ間恋人の手を握り  
 二次会へ行かぬ合図を感じかれ  
 運転手横の信号見てわたり  
 無愛想に信号待ちとバスガール  
 信号へ手上げて通る幼稚園  
 左目のまたたき共に席を立ち  
 信号機に今日一日を指図され  
 肝臓の危険信号酒をやめ  
 せりの指相場の悲喜を一時に  
 こどもまた赤旗道路工事中  
 犠牲者が出て信号機やつとつき  
 信号にウインクされて止らされ  
 信号へお義理に止るダンブカー  
 SOS受信手柄のアマ無電  
 信号待ち交通標語黙読し

信号待ちしてる間に気がかわり  
 ママが居て駄目とハンカチ窓でゆれ  
 急行が素通り駅の青い旗  
 うなずいて母はとほげた顔で立ち  
 亡くなつた子の名で贈る信号灯  
 ビルの窓恋の信号交される  
 信号を無視した事故の恐しさ  
 信号の赤を無視して死を招き  
 信号にじやまされスリを見失ない  
 ヤッホーで互の居場所知らせ合  
 聞かされぬ人が居るので目で知  
 スタートについた眼でまつ青信号  
 住  
 ウインクをモールス符号にして送り  
 住み馴れて犬も信号機に止り  
 笛一つ信号無視の足を止め  
 信号を待つ間も女よく喋り  
 信号は青でもうかうか飛び出せず  
 人の  
 海の旅霧笛奈落へ誘うごと  
 地の  
 信号へ六感動く白い杖  
 天  
 信号を守る幼児がはねられる  
 軸  
 敗色のあせりサインを読み違い

視 察

大森 娛句楽 選

大臣の視察を待ったような事故  
 マンションへ視察繰上げ消えて  
 新世帯母は視察と云つて来る  
 先生の視察よろこぶ自習の子  
 レポートも書かず視察は飲みつ  
 団体の視察へ幹事だけが持て  
 視察しただけで工事はそれつきり  
 土砂降りに土地改良の視察が来  
 公金が酒と女になる視察  
 偉方の視察にゴルフもちやんと組み  
 視察談夜の部は席をあらためる  
 不況の鉱山視察に大名行列し  
 大臣の鉄帽が待つ災害地  
 前ぶれが有つて視察の道なおす  
 方言の紹介もする視察談  
 蛇の道は蛇の視察でいやがられ  
 視察から帰れば妻の眼の温み  
 視察とは別に古墳を見つけたり  
 裏作は視察して来た子にまかせ

春 巳  
 痴 亭  
 秋 月  
 寿 美 司  
 双 楽  
 礎 山  
 露 声  
 秀 峰  
 芳 仙  
 軒 太 楼  
 どんたく  
 光 道  
 宵 明  
 庸 佑  
 光 郎  
 千 尋  
 旭 峰  
 幽 谷  
 征 也

課題吟

本社からの視察慌てるのは幹部  
熱心な視察ゴミ箱まで覗き  
熱心なのが二三人居た視察  
視察団びつくりばかりして帰り  
赤坂の夜の視察もスケジュール  
これでよし視察したあと立候補  
復興の邪魔とも知らず視察に来  
年度末視察々々の席が空き  
御視察へ手土産添えて低姿勢  
視察費が全部浮く程もてなされ  
局長の視察へ掃除行き届き  
篤農の邪魔が又来る視察国  
視察団迎える工場旗を立て  
姉妹都市作つて視察費が嵩み  
恥かいたことには触れぬ視察談  
名目は視察その実弗稼ぎ  
三選のもうアメリカも視察済み

社会党も混る視察を譲り合い  
軸  
童巻に御視察の目は閉じ給い  
宗太郎

童顔

新岡 回天子 選

視察の目急所々々を見て回わり  
うまかつた給食視察した日だけ  
箔だけをつける視察と云う予算  
産業のスパイこつそり視察する  
古都の佳さバスの視察で走り抜け  
人  
スモツグの視察にまわる黒い霧  
地  
天  
天

童顔が惜しまれてる定年期  
童顔にたのまれつい首たてに振り  
大学出の童顔課長の椅子に座し  
童顔のまま散つた子の叙勲来る  
童顔へマイクを向ける宮田輝  
童顔についてかうかと気を許し  
童顔の鬼刑事には子がなつき  
童顔の家長で年中家は春  
一杯を飲めば童顔よい主人  
小卒の社長童顔はころばせ  
童顔へ七人の敵寄せつけず  
童顔が若いつばめとしての役  
童顔を頼りに二十年ぶりに合  
百寿翁童顔すかさず撮るカメラ  
大うつしテレビへ童顔あどけない  
童顔にまといつかれて古稀の膳  
光道  
どなた  
瑞枝  
芳子  
魚山  
痴亭  
保夫  
勝子  
寿美司  
宗太郎  
千翁  
文平  
庸佑  
清泉  
正朗  
初甫

合格の童顔記念写真にし  
童顔へにきびは青春を惜しみなく  
童顔に還つて孫の馬の役  
童顔の仏がおわす山の寺  
童顔の中に威厳の八字髯  
童顔が苦勞をさせます女癖  
童顔に曇る社長のふところ手  
童顔に魅せられ帳簿に穴をあけ  
童顔と言われ部長は気に入らず  
童顔もきよは入社背広なり  
いつくらという童顔の交り難  
童顔をマダムちよびり甘く見る  
ベレー帽の童顔かつての鬼艦長  
還暦へ童顔の母若く見え  
文化章受けるに童顔失なわず  
童顔について説教が出ずじまい  
童顔にして先着の几帳面  
童顔の養子に運が向いて来る  
童顔にひそむ大阪のド根性  
童顔のかげにひそんでいた殺意  
アルバムの童顔これが今の祖父  
人  
童顔は母脳味噌は父ゆずり  
地  
天  
疑のない童顔の眼がきれい  
愛鳩

秀峰  
芳仙  
紫耶  
摩耶  
祥月  
代仕男  
道雄  
素身郎  
無亭  
古方  
健太郎  
礎山  
佳女  
征也  
露声  
旭峯  
文子  
春巳  
七面山  
藤波  
惠二朗  
いさ夢

シヨック

森田茗人選

急停車棚の荷物が転げ落ち  
シヤックリをシヨックで止めた子の機転  
腕時計シヨックあたえただけ動き  
進言状を見てシヨック立ち直り  
遺言状を見てシヨック立ち直り  
シヨック死の悲哀葬式二つ出し  
はなまゝ受話器シヨックの息をのみ  
教壇のシヨック涙の子を見つけ  
非行少年わが子だけかと思うたに  
肺癌のシヨックをかかす高笑い  
切れと言うシヨックに脈もみだれがち  
シヨックから発奮したと立志伝  
シヨック死へ本職の注射こわくも

季 贊  
佳 女  
魁 光  
旭 峯  
藤 波  
清 泉  
瑞 枝  
晃 男  
春 巳  
鬼 焼  
愁 電 子  
初 甫

シヨックとは見られなき手が震え  
シヨック受<sup>けた</sup>失神シヨックで甦り  
ガスタンクの爆発へ腰抜けたまま  
三面の初号活字へ唾をのみ  
浪人のシヨックへ咲いていず  
愛妻に死なれ仏間にひたこもり  
やせ我慢やはり年を知るシヨック  
闘病のシヨック治らぬことを知り  
次男まで家業継がぬとシヨック  
天国は<sup>な</sup>と言ひ切る子へシヨック  
オロシヨックだったタイプミスを打ち  
定年へ部下が大きな事故を出し  
失恋のシヨックが仕事の鬼にさせ  
不合格ママのシヨックへ子があき  
坦々とシヨックに触れている自伝  
シヨッキング実母とばかり思ひ  
鼓動聞かれまい雑音の中にいて  
あの時のシヨック示談で済ましたが

木 魚  
光 郎  
七 面 山  
十 九 平  
不 水  
道 雄  
礎 山  
祥 月  
健 太 郎  
和 宏  
素 身 郎  
幽 谷  
可 住  
章 雅  
古 方  
代 仕 男  
芙 巳 代  
芳 子

簡単にシヨック死として片づける  
雑草の強さシヨックに負けていず  
背むかれたシヨック静と茶を啜る  
小心の母のシヨックを先ず案じ  
香煙の写真シヨックを知らぬ顔  
母親の素性初めて知る戸籍  
シヨック受けながら心の灯に縋り  
シヨックにめげずに次の案を練る  
爆音のシヨック卵をもう産まず  
お詫び—御督促をいただいた直後、会員宅  
に不幸があったり、雅友の入院、小生の母  
の負傷などと続きましたので、ご投句諸氏  
や編集部にたいへんご迷惑をかけたことを  
深くおわび申し上げます。(森田茗人)

旭 峯  
紫  
千 久 良  
藤 波  
可 住  
利 美  
千 代  
文 平  
恵 二 朗

漫画と

川柳



谷 沢 好 祐

私はある本の漫画教室を読んでいると、漫画家はこう言っている。

「年期を入れるのは、無駄な部分をスパッと削れる腕を磨くためなんです。単純な線で描き出された漫画は、すつきりした小ばなしに通じるものです、簡潔—これこそ漫画表現の精神です」と。これを読んで私は、漫画な

る芸術もまた、川柳と一脈相通じるのではな

いか、と言う事に気が付いた。さらに続けて「漫画では構図をまとめるのに、人物と背景の画なら暗示的なバックは、ゴテゴテとしたバックより遥かに頂けることは確かです。優秀な漫画家はわずかな線でそういった雰囲気が見事に捉えられています」と。

今こんな着想があったとする。適齢期の娘さんが、婚約したのもう今までのように思

うまにボーイフレンドと遊ぶことが出来ない、女友達と一緒にそうそう映画や、ハイキングや、喫茶店へも行っておられない。台所仕事などの花嫁修業もせねばならない。すべてで制約を受ける娘—これを材料として川柳にすると、

婚約中映画や喫茶遠くなり

婚約で自由行動ももうとれず

結納が来たら勝手に遊ばれず

初心のうちにはこんな表現しか出来ない。これではごてごてしたバックを使っている漫画と同様で、はなはだ頂けない句である。この材料の中で中期の入った川柳家なら、やはりムダな部分(映画、喫茶、花嫁修業等)をスリットと削る腕がある。そしてわずかな(小さな)ものでそんな雰囲気を見事に捉えているエンゲージリングで体しぼられる 知恵美 実に巧い表現である。女流作家であるからこそ、女の心理状態が良くわかるのであるからうか。簡単なもの(エンゲージリング)で表わされ小ばなしぐらいの味もある。例え婚約指輪なんか貰っても、もらわなくてもその言葉で、婚約中という言葉に代えてもらって来たところが良いし、体しぼられるとは非常に適切な技巧でピタリと来ている。

税務署へ親指おかし程あわて

井蛙

今の今まで、えらそうに使用人どもに言っていた商店の主人を、親指なんて暗示的な、

しかも簡単な言葉で表わしている。

冷戦へバーのマッチが火をつけて 方大  
主人の背広のポケットにあったバーの広告  
マッチ、これが動かぬ証拠で、主人の申し述べた帰宅遅延の理由が嘘だとばれた。奥さんはとたんにプーッとお顔の形が変わり、無言の行のごとき冷たい戦争より実力行使の熱い戦いへ、発展したのである。この句の場合も(ポケット、夫婦喧嘩、女房、嘘等々)の言葉は全くオミットされて、夫婦喧嘩を冷戦なる暗示的な言葉で上手にちぢめている。

漫画教室には続けて「漫画の中の人物に生命を与えるには、画く人がその人物になり切りそのシーンの中に入り込みパントマイムすることです」とある。前の句では作家がその娘になり切っているし、中の句では作家がシーンに入り込んでいるからこそ佳句が生まれるのであろう。

例句は川雑川柳塔(昭三二・九月号より)

### 川柳行脚

### 四国霊場巡拝

### 河本南牛史

とほとほと同行二人、四国霊場巡拝、川柳行脚の旅に出る。松山駅で柳友T女史のお孫

さんがおって見送りを受け、お接待の第一号をいただく。(註ご接待とは四国遍路に善根の送りものこと) これからの友、大洲の上甲可洲氏、どうぞよろしくお願ひしますとだけの言葉で、長い目的の旅。やわらかな気持がふれ合った。

バスは国道三十三号線を南へ、途中下車は通称、椿さん。縁起の宮である。伊予豆比古神社に参拝。記念写真は昨年天皇陛下が植樹行幸の佳日に建設された。南牛史の句碑の前で撮り、  
霊場四十六番へ

### 納経の汚し初めは浄瑠璃寺

(註 納経とは一巻のサイン帳にして本尊名と寺号を記して大きな判を三つ押して参拝唯一の記念品であり、昔は難病の人や、不幸続きの人は納経本をいただいただけで病氣は平癒し、不幸は倅になれるとの伝説がある。) 四十八番、清滝山。西林寺ではテレビの取材班に出合い、声高らかにお題目をとまえ、納経をすまして咲き盛る花にしばらく足を休めた。

### 清流に若鮎はねる寺の鐘

と併句とも、川柳とも、つかぬ句が生れた。次の浄土寺へ錫杖を引く。

### 絶景へ遍路の足の遠まわり

大萬川柳

誤算

入選発表

選者	清水白柳
投句総数	八百四十六句
入選	九十十三句

伊丹千尋 誤算とも云えず辻褃合わせとき

守口笑風 倅せな誤算多産系だった妻

鳥取恵子 自分だけ除けて逃げてく金に見え

今治青女 一生の誤算悪妻ですとのろけとり

大阪浩一郎 正直に誤算みとめていくはんこ

鳥根芳子 お互いに誤算だったと倦怠期

岸和田千舟 思惑が外れて揉める形見分け

福井雅城 反対が味方から出た本会議

鳥取法泉子 票読みのいまさら誤算とも言えず

大阪恭太 太鼓判教師がおした子がすべり

尼崎利美 辻褃は合わせ誤算は葬られ

大阪鉄舟

つり銭をもらいそこねた市場籠

一ミリの誤算硝子のはまらぬ

おごつてもう方へサービスははらう

酔うていたなどと契約反古にされ

誤算から痛くない腹をさぐられる

ボーナスの誤算は茶の間一ともめし

折れたらつっかかりおだてたらのぼせ

運のいいときは誤算で飛躍する

腹の立つときはそろばんでも違い

レジスターのミス温かい眼でかばい

夜食まで出して誤算が見つからず

女児安産誤算ですとは言うましく

大阪章雅 帳尻が合わずデートの刻迫る

倉敷素身郎 落選はするし違反も出る誤算

西宮多久志 参謀の誤算玉砕で飾られる

米子千代 かけひきが過ぎ予約を取り消され

大阪旅風 金持ちを不思議がらせて養子去ぬ

豊中古方 ゼロ一つ違うてたよりないお方

大阪琴女 与党から反対が出てあわてさせ

香川酔夢 筋書きの誤算懐柔策ならず

鳥根代仕男 ほめられるつもりが詫びる破目になり

加賀光郎 ボタン穴最後に足らぬかけ直し

大阪痴亭 愛だけで食えると思う娘の誤算

東大阪清人 一人分足らぬ産衣へちとあわて

大阪阿茶 逃げる気で出したエースが乱打され

高石好郎 飲ましもしたのに貸付もつ変り

西宮仙葉才 見てほしいときに上司は振りむかず

大物の自負で誤算に意地を張り

すばらしい 着心地

蝶矢 シーツ



宝塚ゆきを

帰国後はよその会社へ就職し

子供だとハナから舐めていた誤算

大阪頂留子 正直なお人釣りが多いと云うてくれ

お愛想へつけ落ちている煙草代

大坂漣

主催者の誤算補助椅子まだ足りず

利子取つて殖やすつもりでいた誤算

加賀一路

夢託す子は雪山へ行つたきり

若き日の誤算をドヤでふりかえり

富田林 きはち

誤算ではないと言ひ張る車中談

誤算ではない紛飾の決算書

宝塚無聖 蛇の道はへびで誤算を見つくだし

ぼっくりと二号の誤算旦那死に

岡山 照路

着流して来たのに上座へすすめられ  
息ぬきに訪えば夫婦が揉めていた

大阪 あいき

こんな管じかたのダルマは片目だけ  
里がよいからもうたのじてこ入れしとす

並岡 要次

誤算だと指摘されても臍におちず  
もらい過ぎだった客のあとを追ひ

大阪 文秋

全集の解約増えてくるばかり

確信があった部長の椅子に洩れ

高槻 静馬

追加したぶんがそのまま売れり  
サービスの品だけ売れる忙しさ

南河内 吸江

花見茶屋雨でおでんの煮えつまり  
借金で出した支店が命取り

富田林 美房

神様の誤算か原爆つくる知恵  
父と母どっちも見そこなったらし

大阪 梅里

名人に誤算があつて投了す  
二次会は奢つてもろたと思ひ込み

尼崎 慶彦

余る苦ないと誤算見つけられ  
誤算だと知つてつり銭改めず

尼崎 としみ

盗人に追い銭だったことがばれ  
家計簿は誤算のまま繰越され

一現は誤算のままで払らわされ  
儲かったつもりが誤算だとわかり

岡山 秋月

第九条作つたアメリカの誤算  
負けぬ気が誤算であつたとは云々

明石 齊花

賄賂だけ取られ誤算をいま気づき  
そろばんの間違い筆算してわかり

大阪 滋雀

三人のそろばん三人とも違い  
これからというのに露店品切れし

大阪 柳志

お互いに誤算を悔み合つて添い  
素晴らしい誤算銀行ウンと云い

大阪 飛び出

これ以下はない私立校まですべり  
デパートの誤算マイクで呼び出

飛びついて夕とグラム読み違え  
四つ玉のミス筆算でたしかめる

宝塚 ゆきを

金貸しを仏のように見た誤算  
期待した妻のへそくり娘にとられ

京都 句楽坊

いまだから笑い話ですむ誤算  
世渡りの誤算スラムの風に馴れ

大阪 十悟

学資まで出してうちの娘嫌らわ  
人ノ句

香川 醉夢

岡山 幽谷

税金にとられることは忘れとり

地ノ句

両親の誤算二男も農継がず  
天ノ句

出雲 健太郎

日本の誤算神話に頼りきり  
建て前に鋸を使うている誤算

選者吟

大萬川柳ベストテン  
(四月現在)

富田林 美房

美房

清人

弓彦

梅里

健光

魅太郎

健太郎

琴女

幽谷

文秋

木魚

滋雀

薙花

蒸太

利美

魚山

柳志

醉夢

悟

昭和四十二年度第六回

兼題「辞退」五句以内

締切 六月二十五日  
発表 七月二十日

第七回予告

兼題「附近」五句以内  
締切 七月二十五日  
発表 八月二十日

投句先 大万川柳野区

松崎町三ノ一〇

大万川柳会



マイペースで飲もう

アサヒ  
スタイニー

# ☆ 柳 界 展 望 ☆



故村田周魚氏 (雅芳院周魚日泰居士)  
浦和市小池鯉生氏写真提供  
橘高薫風担当

▼麻生霞乃先生から、「昔の生駒町は軒並みに桜の木があつて町は花のトンネルで、商店の袖看板など満開の枝で見えなかつたそうで、街の道路を舗装したからみんな枯れてしまつたことです。自然の大好きな私は自然を毀す文明を憎みます」それから吉田水車さんの川柳の省略法に引用された路郎の句は金の字は不要で「借りる氣で行けば

有馬の夏と聞く」路郎  
▼中島生々庵主幹は三月十日の総会で、南区医師会会長に三選された。  
▼むらくも川柳会(島根県)主催の観桜句会は四月九日遠来の水客氏や緑之助・新雪・代仕男・祥月諸氏を迎えて開催。  
▼須崎豆秋七回忌追悼句会は四月二十日午後六時から松崎町大萬で開催、多彩な顔ぶれが集い故人を心ゆく

ばかり愚んだ。  
▼佐伯和氣合同春季川柳大会(岡山県)は四月九日佐伯町役場で開催。  
▼平賀紅寿句集「暮盤目」が五月七日京都番傘川柳会から発行、同日出版記念句会が京都タワーホテルで開催された。  
▼川上三太郎氏の受賞記念の手拭いの追加ができた。  
//酒うまし汲めども尽きぬ夜もうまし// 定価一本送料共百五十円。東京都台東区下谷二丁目二〇の九。川柳研究社。  
▼第六回全伯川柳大会は九月十日日伯毎日新聞社大サロンで開催される。自由吟三句を六月三十日まで安藤魔門宛。MAMON, ANDO RUA SEN ADOR FEVO. 3 0 20S-204. SAO PAULO BRASIL.  
▼札幌川柳社は同人総会で同人会議から主宰制に運営方法を切り替えることを決議、主宰者に斎藤大雄氏が推薦を受けた。(三月八日)

に限定百部を発刊された。まえがきにある通り鉄筆を持つのも初めての著者が原紙を切り、手製の謄写版で刷つたというのでレス程度で費用で百部が出来たそうだが美本。「鮎食える頃の約束して吉野」「猿沢の鯉入れかわりたちかわり」など奈良を詠んだものが多い。  
▼第六回西条川柳大会は五月七日正午から広島県賀茂郡西条町の耕道会館で開催  
▼川柳句集「西条酒」が四月二十日西条酒研究会から発行された。  
▼全国川柳作家「酒の大口集」(仮称)発行のため柳人自作の酒の句三句以内(既発表可)が募集されている。往復葉書に住所氏名雅号年齢職業所属柳社などを明記の上八月三十一日までに広島県賀茂郡西条町山口山陽一酒造株式会社内  
番傘川柳社幹事長  
生島鳥語氏急逝  
五月二十三日二時から自宅で告別式。本社から生々庵主幹ほか多数参列。謹悼

六月の句会	
五造川柳会(大阪市)	時 10日(土) 午後六時 題 目 じるし・のんびり 賑やか
米 玉造交差点南一〇〇	所 大阪信用金庫
南海電鉄川柳会	時 15日(木) 踏切・証明・ひやめ
所 ナンバ 高架下	親和クラブ
南大阪川柳会	時 20日(火) 午後六時 いそぐ・謎・特別・熱帯魚
所 アーベノ区松崎町三の	大 萬
菅生生活吟宛。	
▼川柳研究社(東京都)では「これからの女性川柳を考える会」を五月二十一日山村祐氏をゲストに迎えて「討論と座談会」等を開いて、意欲的な会の姿勢が想像出来るので持続して研鑽されたい。	
▼清水白柳氏(大阪府)は四月八日から三日間故里の小松市へ、十六日には夫人の実家へ墓参がてら白浜ま	

でドライブ、二十三日は備前川柳会と休日もない慌しさだった。

▼西尾菜氏（八尾市）は四月十六日八尾ライオンズクラブのメンバーで琵琶湖畔のホテル紅葉へ。ここでも名司会ぶりを発揮中、旅館組合の会合で来合わせた薫風の拍手にびっくり。

▼清水一保氏（鳥取県）は四月十八日神戸の「湯の街の桜花に春がよみがえり」の句信を寄せられた。

▼大坂形水氏（大阪市）は業界誌「ザ・マン」四月号に、脱俗した人間味で人格形成に役立てよう、という題で川柳を引用して執筆、好評を得られた。

▼菊沢小松園氏（大阪市）四女千代さんは四月三十日本町の大阪会館で阪大教授

久保田肇氏長男隆氏（丸紅飯田輸出部勤務）と華燭の典を挙げられた。おめでとう。



▼川岡霊眼子氏（諫早市）指導の諫早川柳文化会の島田破竹氏、前田峯泉氏は、明治百年川柳大会と長崎県下大会とで入賞、金盃銀盃を獲得された。句はそれぞれ、「一徹な明治巨匠の中に生き」、「敗戦の昭和日本が小さくなり」

▼三井醉夢さん（香川県）

はずいひつ無帽に「ある断層」「春の騒音」などの随筆をものし、川柳とともに忙しい主婦業の潤いにさかれている。

▼直原七面山氏（岡山県）は四月二十三日備前川柳社の会で清水白柳氏をはじめ川柳塔同人の方に多数お目にかかれて嬉しい一日を持つことができた。

日曜に積尊降誕を大々的に祝うのですが、費用は加味郡政府が出しますが、こんなことは世界で当加味だけではないでしょうか。

▼月原宵明氏（今治市）は三十九年動続の銀行生活から引退十八年ぶりの故郷へ落着かれた。（今治市桜井東天神町）また、令息が和歌山大学へ入学されたので本社へ参ることもあろうかと存じます。

▼藤原秋月氏（岡山県）は四月十六日宮島広島観光に雨で思うようにならず、原爆資料館では戦争の恐怖を見ましたと、「広島へ皆んな涙を置いて去に」

▼石坂新雪氏（米子市）は四月九日の木次の花見句会に出席、花は見すなつかしい柳人に歓待を受け嬉しく帰米。

▼太田湖平氏（福岡県）は立稽古中硬直した手首を骨折、難渋しておられた。

▼田中常夫氏（名古屋）は名古屋市中千種区若竹町の一七第一銀行若竹寮内へ

▼堀江正朝・芳子ご夫妻から、「二十六日の一三夫先生の書かれた漫才台本たのしみでした。知人にも知らせて拝聴しました。大阪の

大会はいつでしょうか。▼出原真奇氏（笠岡市）谷口鈍愚坊氏（笠岡市）の旅便り。「月でなくうすうすしてる桂浜（麴）」「月なくも人でにぎわう桂浜（真）」

▼河相すゝむ氏（西宮市）は四月二十九日から三日間薫風と母らと同道有馬「欽山」に逗留、大山あや子さんを訪問したり連休をくつろがれた。

▼高知川柳社移転、高知市大川筋一七三 川竹松風方

## 新同人紹介

小島

静水・白柳推薦

村上

上春巳  
笛生・薫風推薦

はげぬ・かぶれぬ白髪染

# 男まえ理容

環状線寺田町裏駅南一丁

# 本社 五月句会

会場 自安寺  
六日 午後六時

ゴールデンウィークは野へ山へ——こういう時の句会はヒヤヒヤするものである。かて夕刻から降りだしたので、予感はずかたが、サテ本番ともなれば会場はギッシリつまった。

「せんば」の宣介主幹をはじめ、他社の方々の友情出席は毎月のことながらありがたいことである。

最近の柳話グループは評判がいい。というのは思いつき話ではなく、ちゃんと原稿まで出来ているのである。多久志氏は、ご自分の経営学から、アイデアの勝利を課題吟むすび、東京と大阪の喫茶店の売り上げにまで話が進む。

句会で二十一句出すが、六句入選すれば三割打者である。その三割打者になろうとすれば、日ごろのトレーニングも大切だが、なによりもユニークな題材をつかむことにあると喝破された。

席題「鯉」の場合、百八十句の中から入選はわずかに二十三句である。実に百五十七句落ちることになる。こういう意味からも、多久志氏の柳話はホームランだったと思う。だ

れにでも思いつく句はやはり避けることが三割打者に通ずる道なのである。「予感」の選者、句会部長菊田いさむ氏は母堂ご逝去の後始末のため後藤梅志氏が代選された。

五月句会のトップは金井文秋氏の秀句に輝いた。七題中五題までボツで、「きょうは全ボツや」と、あらためていたが、実に最後の題で大ホームランである。

内藤ささ子さんが2ホーマー、不二田一三夫氏が今年二度目の2ホーマーも空しく惜敗した。「スランプですの」という前田美巳代さんがまた名句を放たれた。姫路から毎月出席される熱意に柳神もほほえむというものである。

五月雨煙る夜、九時半に閉会。  
(七月九日(日)は午後一時から、この会場で路郎忌句会が開催され、閉会后、会場裏の喜楽別館で晚餐会があります。この会費は五百円。別項参照)

(河井庸佑整理)

出席—与呂志・静歩・白溪子・瓢太・一舟  
・古方・静馬・一三夫・一栄・双楽・文秋・加仙・多蘭子・操子・杜のきさ子・梅里  
・玲人・武助・好郎・吸江・春巳・弓彦・滋雀  
・誓二・継之助・柳志・天樹・清人・美巳代  
・梅志・葛城・多久志・雄声・祐次・茂夫・トメ子・白柳・形水・宣介・小松園・笑風・喜醉・庸佑・幸雄・生々庵・季贊・勝晴・たつみ・弥生・雄峯・すゝむ・金三・凡九郎・千梢・句楽坊・有子・薫風・恒明・柳宏子・葉子

## 席題「過去」

海士天樹選

過去秘めた折目正しい手に酌がれば  
波瀾万丈誇張もちよっぴり立志伝  
遠花火奇麗な過去を捨てきれず  
温故知新今日も飛鳥の地にいどむ  
やがて過去になる仕合せが短かすぎ  
つくばいの苔に名士の影が出し  
恐山過去をずるずるしゃべり出し  
ブルースがかり過去の胸うずく  
眉ひいて女は過去へそっぽむき  
いみじくも過去はほのぼのデスマスク  
捨てきれぬ過去に似たプロフィール  
華やかなネオンの蔭に過去を秘め  
都会の灯過去にはふれず生かさせる  
恵まれぬ過去が苦難に耐えてくれ  
他愛ない会話を過去にぞかせる  
雪深いダムの飯場に過去を捨て  
この人の過去大陸の月をほめ  
許されているのか過去にふれて来ず  
過去未来唯一線と言ふ恐怖  
生きがいを私の過去に支えられ  
ネオンからネオンへ過去がまとい  
ジョンウオーカー過去が鋭くついで  
ベールに包み過去はそっとしまえる  
胸に手を合はせるとき過去よみがえる  
君のいまその一秒も過去になる  
秒針へ大きく息を吸うてみる  
壁に座せば孤影わびし過去おもう  
振りむかず愛一筋に秘めた過去  
ついてくる影にあはかれそうな過去

滋雀 一三夫 勝晴 誓二 白溪子 杜の 静歩 葉子 梅里 生々庵 春巳 勝晴 与呂志 梅里 継之助 滋雀 祐次 一舟 凡九郎 生々庵 武助 静歩 宣介 凡九郎 古方 一三夫 天樹

席題「鯉」

植山武助選

名園へ調和がとれてる鯉の群れ 白溪子  
 鯉のぼりどこから吹くもさからわず 葉子  
 スモッグの空へもたつ鯉のぼり 静馬  
 三階におしめと列ぶ鯉のぼり 幸雄  
 鯉階り女系家族をうらやませ たつみ  
 瀧がある鯉の鬮志は陽をはじき 天樹  
 瀬に挑む鯉の威勢にはげまされ 双楽  
 倒産の床に残った昇り鯉 滋雀  
 鯉呼べば水に五重の塔がゆれる 一栄  
 鯉の気持ちとらへらな速成飼育法 雄声  
 鮒を買えばおとさん鯉を呼んでくれ 春日  
 名園の鯉金色に住み古りて 春巳  
 淀川の幅の広さに鯉は跳ね 宣さ  
 池の鯉シャッターチャンスも待ち 清人  
 つり堀の鯉に短気をあなどられ 柳志  
 錦鯉の大きさ展示会に馴れ 白溪子  
 嬉しい日鯉腹まで出した水しぶき 千梢  
 立志伝座右に鯉の流のぼり 雄声  
 売家の下見へ緋鯉跳ねて見せ 梅里  
 流のぼり鯉習性と思つてい 雄声  
 観光の鯉満腹になる人出 操子  
 養殖をされて丸あげされる鯉 千梢  
 組板の鯉さと定年言うものの 一三夫

席題「しぶちん」

岡橋宣介選

しぶちんの葬式世話人 氣を使い 与呂志  
 旅プランしぶちんが居りまともらず 季替  
 別れてからしぶちんのおき分かり 千梢  
 割り前をしぶちんを出してよけい食い 葛城  
 しぶちんが死んで葬式派手に出し 喜醉

しぶちんが払うて割勘みんな済み

白溪子

寝ころんでしぶちんらしく動かない

白柳

親の墓たててしぶちん見直され

多久志

しぶちんの晴着着ぬまま派手になり

きさ子

しぶちんの寄付は予算に入れとらず

一舟

しぶちんのデザートはうどん食て別れ

一三夫

アメ玉を独りしゃぶって

勝晴

しぶちん同士金の話でいきづま

庸佑

しぶちんの親と養子でもめ続け

誓二

二代目も安泰しぶちん引継がれ

梅里

しぶちんがマッチの燃えかす残し

静馬

しぶちんの親に似合わぬ器量よし

形水

しぶちんの意見を入れて旅プラン

季贊

しぶちんは上手に人を使い分け

トメ子

塩こぶをしぶちん少しずつ嗜り

トメ子

しぶちんが死に葬式の派手なこと

玲人

しぶちんで通した割にためてない

千梢

手も皺になりしぶちんで悪るびれず

梅志

しぶちんの財布小銭で用が足り

茂夫

しぶちんの家の桜が見事なり

きさ子

しぶちんの留守の三和土に塵もなく

宣介

兼題「ガレージ」

本多柳志選

松を切り桜も挽いてチャチな車庫 よしを  
 その上にガレージまであり男前 野迷路  
 ガレージの昼は子供の遊戯場 頂留子  
 ガレージは遠くにあつて間に合わず 喜仙  
 西瓜の出来見越えガレージ先に建て あいき  
 ガレージへ寺の空地も狙われる 章雅  
 ガレージに埃をためて倒産し 齊花

ガレージの泥ひき逃げの足がつき

多久志

家宅捜索ガレージから出た書類

好郎

ガレージはからっぽ野山は五月晴れ

勝晴

サボテンをどけてガレージ出来上り

きさ子

ガレージもならセールスつきまとい

操子

借金で建てたガレージとは見せず

たつみ

ガレージの事を忘れたカーブーム

すゝむ

ガレージがある名目で許可が下り

金三

ボンコツも新車も同じ預け賃

小松園

取賄か無罪かガレージ閉めたまま

好郎

ガレージの上り遺産となる母娘

多蘭子

盛衰をガレージだけが知っている

天樹

颯爽とガレージを出るサングラス

勝晴

ガレージへ宮様お着きになる時刻

清人

ガレージを建てて車を売りに出し

生々庵

此頃の地価でガレージ見積られ

小松園

手離した車ガレージ大が住み

茂夫

牛小屋もガレージ甥の代となり

祐次

上役を訪えばガレージから戻り

白溪子

ガレージへ七つ道具を置き忘れ

静歩

ガレージの鍵見つからぬ日曜日

一三夫

ガレージで見れば静かな消防車

柳志

兼題「予感」

後藤梅志選

予感まだ絶対勝ちとまでいかず 野迷路  
 落選の予感もどかし吸入器 章雅  
 予感積み重ねてくじを買いつづけ 宣介  
 信仰にこつて予感がよく当り 双楽  
 予感吹きとばした今日の内祝きさ子  
 婚礼のトラックと逢う良い予感 形水  
 予感ピタリ彼女から電話 恒明

転動の予感頭にびんと来る  
 一方の心が予感を否定する  
 喜ばせておいて茶柱横になり  
 予感どおりまたまた女の児が生まれ  
 人間のもろさ予感が恐ろしい  
 いまわしい予感乳房の血が凍る  
 巧妙な話術に予感消えかかり  
 それとなく遺言聞いておく予感  
 定年へ事故の予感がつきまとい  
 残業の予感家は笑ひ事で済み  
 消しても消しても暗い予感の闘病記  
 今夜来る予感へ化粧念がいり  
 故郷今もカラスの声を信じ切り  
 星一つ流れて予感寝つかれず  
 こないなるやろと思うた朝帰り  
 予感的中裏切り者は末娘  
 予感通り夫宿直しておらず  
 今だからいうと予感のことに触れ  
 好きになりそうな予感がこわくなり  
 グルらしく予感にしては詳しすぎ  
 入学へ悪い予感が逆になり  
 怖いほど予感のあたる妻と居る  
 ロープウェイ変な予感も乗り合せ  
 だれか来るような予感へ花を替え  
 悪い予感はいやむやですましく  
 手相見が悪い予感を輪をかける  
 嫌な夢見たと予感を言い歩き  
 叱られる予感へはずすタイムिंग  
 わるいことだけは予感のよくあたり  
 徒食して悪い予感をよく当り

喜花 薺次 祐雀 滋天 一三夫 笑風 好郎 白柳 白柳 文秋 生々 多志 多志 恒次 恒次 生々 与志 与志 好郎 好郎 古方 古方 柳志 柳志 弓彦 弓彦 雄声 雄声 梅里 梅里 滋雀 滋雀 操子 操子 季贊 季贊 静馬 静馬 雄峯 雄峯 美巳代 美巳代 一三夫 一三夫 きさ子 きさ子

落ちてゐる予感電話も掛けて来ず  
 兼題「手」 高橋操子選

動く手に血がたぎってる 嚙唾の恋  
 手をポンと叩けば下るたたき売り  
 腹割って男と男手を握り  
 ポストまで届く両手を見手に来る  
 手画きでも出ぬ臘額のおもしろさ  
 大びらの酒は手ぶらで帰って来  
 手の早いパパへ子供は身構える  
 優勝のチームへ手拍子よく揃い  
 ふきをむく指先春の香に染めて  
 両の手をついたうなじは許される  
 長雨にあふれ飯場の手なぐさみ  
 再会の手と手無言で目が語り  
 小包は母の荷造り手の匂い  
 無帽主義日向をあぐる手をかざし  
 手のかからぬ子にみな育ち老を知る  
 手の空いたときは魚屋水をかけ  
 手を引いて歩いてくれる嫁がおり  
 指のない手を画き子供ホットする  
 親展と書うぬくから決心の手がふるえ  
 栄進を祝うぬくから冷めたい手  
 窮すれば手真似でさえも事は足り  
 オートメに千手観音お手あげし  
 寝せつけてからが身の入る手内職  
 盲人の手に文鳥のこそばゆし  
 受け入れる愛はうれしい手をあずけ  
 叱ってはみたが孫の手柔らかき  
 苦勞してよかった我が手ソットなで  
 兼題「砂」 菊沢小松園選

梅志 野迷路 瓢太 瓢太 柳志 柳志 章雅 章雅 静馬 静馬 清人 清人 形水 形水 宣介 宣介 梅里 梅里 与志 与志 トメ子 トメ子 白柳 白柳 瓢太 瓢太 静馬 静馬 庸佑 庸佑 季贊 季贊 生々 生々 瓢太 瓢太 双楽 双楽 金三 金三 きさ子 きさ子 宣介 宣介 操子 操子

蟹の住む砂をダンパが持って去に  
 月見草ローカル線の砂に生き  
 砂だらけ転んで跳ねて子は育ち  
 一鉢の砂にも困る街に住み  
 砂に書く文字もはかない恋に似る  
 波打ち際に立てば生き物のような砂  
 手料理をほめたとたんに砂を噛み  
 砂に痕つけて女は立ち上り  
 にえきらぬ恋砂浜に文字を書き  
 芝生も砂場に変えて子は育ち  
 砂遊びする児工事場から運び  
 砂の山遠まわりして蟻の列  
 水を得て砂いきどおる山つなみ  
 砂を噛む思いで許す子の縁談  
 砂文字はOKと書き恋みのる  
 ダンパカー砂をこぼしたまま走り  
 執念を込めて鋳物師砂をかき  
 砂浜のムードへ月が出て呉れず  
 保育所の砂場が狭い五月晴れ  
 普請場の砂へ子供がまたたかり  
 砂吐かぬ娘も目方に入れて売り  
 トンネルへ未練砂場の子が帰り  
 いのち無き砂啄木を思い出し  
 砂浜の蛸はりつけでぶら下り  
 雨つづきもてあましてる猫の砂  
 猫の砂はやいて二号買いにやり  
 砂壁の孫には脆いものど知り  
 はかなくも波に崩れる砂の城  
 一日を終えた仕事の砂が落ち  
 砂なればこそ乾き切っても手にの

齊花 齊花 薺次 薺次 たつみ たつみ 凡九郎 凡九郎 梅志 梅志 文秋 文秋 古方 古方 静馬 静馬 吸江 吸江 梅志 梅志 葛城 葛城 生々 生々 多志 多志 多志 多志 一三夫 一三夫 梅志 梅志 滋雀 滋雀 玲人 玲人 きさ子 きさ子 滋雀 滋雀 操子 操子 継之助 継之助 吸江 吸江 一三夫 一三夫 天樹 天樹 文秋 文秋 小松園 小松園



▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。

金井文秋担当

むらぐも川柳会

藤井明朝報

世話好きの夫婦が春が待ちきれず  
世話好きの妻仲人も買つて出る  
やつと寝た児へ診察の順が来る  
安全が何よりですとお茶を入れ  
ほろ酔いのどもりスラスラ唄い出し  
人生を安全運転父として  
ほろ酔いの口に囁んでる妻揚枝  
百年を生き抜きかわらぬものは愚痴  
百までも生きてと愛想敬老日  
孫の守でできる自分に感謝する  
近くまた遠く世話人そつがなし  
好きだから矢たらと世話をやきたり  
のこり酒あつめ世話役飲みなおし  
世話好きのまねよほどのわけがあり  
世話役の外にただ今用ががなし  
赤字までうめねばならぬ世話をやき  
世話好きが風邪を土産にもらつて来  
雲水の世話になります薪を割り  
世話好きがどこ会にも顔を出し  
先生の声がやさしい参観日  
脂粉の香残して帰る茶の先生  
先生の嗜茶の間で評価され  
先生を異性と気づいた日のわびし

芳正磯敏李節清青明快白大和軒冬舞舞  
子朗山男朋枝泉磁朗哉汀鳥幸太郎樹吉  
歩

もう先生と女子学生でない二人  
先生は教育ママにしてやられ  
大胆な質問先生赤くなり  
先生も落選ただの先生なり  
冗談の中に人間味があふれ  
全快の窓冗談も軽く浮き  
冗談の一つもとばし嬉しい日  
孫一人出来て通帳が一つふえ  
せびられて財布を甘く孫に解き  
嘘だと言えず苦しい嘘をつき  
大学生世話女房の世話をさせ  
停年退職すぐ町内の世話をさせ  
世話役も疲れたあとの酒の味  
勝手に世話して自分で腹を立て  
世話ついで公私ミス損になり  
生き甲斐に人の世話とはおそれいり

南大阪川柳会

金井文秋報

好物と別に豆腐の好きな訳  
かにの眼へ汐みちてくる満ちてくる  
縋り付く相手の背中撫でてやり  
運わるいカニは子供の方へ逃げ  
赤ちゃんの手相に仲居なりたがり  
ママは愚痴パパは夕刊読みつづけ  
世間みなめくると落選まだ思い  
豆腐金の魚すくいに似た手つき  
カニ食べるコツは知つて短気者  
きざまれて豆腐のいのち生かされる  
直角に節曲げ敗戦生きのびる  
うぬぼれるだけは何もないおだて  
直角に別れるだけ何もないおだて  
にくめないうぬぼれ黙つて聞き置き  
小使を相手に黒を握らされ  
直角に腰据えてゐる鬼瓦

文恭あ一笑す天凡好柳白静水漣  
秋太き痴む樹江九郎郎志柳馬園客  
朗雪甲案夢代草郎生千みえ草代郎生

カニ料理仲居さくに手を汚し  
直角の水角からくずれだし  
信仰で不幸つづきな灯きともし  
水族館の蟹横柄な歩きとよし  
相手にも考え直す余地をやり  
正座した姿が直角の影うつし  
しよつてる顔顔顔のコンテスト  
カニの眼で潜望鏡を思いつき  
うぬぼれの背で女は舌を出し  
カニの目が悲しバケツを出られない  
先輩へつづく職場に希望もち  
愚痴一つこぼさぬ相手肩がこり  
直角の証明どこやら遊戯めき  
女秘書恋の相手は別に持ち  
血のめぐり悪い相手で根負けし  
切れそうでまだつづいてるくされ縁  
うぬぼれて居たが所詮は金だつた  
ようやつとわがうぬぼれを知つて  
相手には不足はないと云う浮名  
タミナル相手はついに現れず  
結局は酒の話になる相手  
指十本濡れるにまかす美味いカニ  
直角の姿態の影から春のぞく  
相手見て値動き荒い宝石屋

玉造川柳会(大阪市)

西出一栄報

リモコンのようにタバコを吸う喫茶  
候補者をならみつければ頭下げ  
落選も三度普通と見てくれず  
遭難にママろうろとしてるだけ  
大掃除猫も居場所が定まらぬ  
はた目はらうろうろして儲けとり  
新入社ただらうろと落付かず  
すりの強い妻のバツクに実家あり  
新入社ただらうろと落付かず  
すりの強い妻のバツクに実家あり  
新入社ただらうろと落付かず  
すりの強い妻のバツクに実家あり

金寿梅文柳水一舟遊一  
三美司里秋志京舟遊一

春うららひとりの民謡口ずさむ  
セツクスも素朴に唄う盆踊り  
民謡から軍歌ポチポチ座が乱れ  
民謡はいいな故郷が話しかけ  
原因をつまんで見せるピンセツト  
匙投げた医者も寿命は別と逃つ  
親切に聞いて歯医者はおきまわし  
外科内科小児科産科村の医者  
お医者さんをも信じて今日も病みつづけ  
女医若く患者の視線もをとり  
一割の奇蹟を祈るメスをとり

ウイロー社句会 (ハワイ) 築山快夢起報

負けて勝つ手も心得て無難なり  
争つた人には負け手が今の幸  
孫と相撲祖父負振りも派手にする  
負けて勝つ云う手もあつて痴話喧嘩  
負けて勝つ氣へ日々の倅を知り  
誘惑に負け哀れな虚栄心  
負けて勝つ嫁の機転を義母はほめ  
勝ち負けは時の運だと云うて去に  
負けながらも楽しきかかと敷かれて居  
口惜しがり負けてやつたと負け嫌い  
負けつて勝つ女に真珠の涙あり  
負けたとはいわず不運にかこつける  
人情に負けて保険を負けまされる  
負け方方から握手を負けました  
勝ち負けは別に奇麗なゲーム見せ  
負けるも死んでしまえと他人の意地

岡鉄川柳会

藤原秋月報

一 章 滋 眞 双 静 天 柳 李 美  
万 里 水 泉 快 紅 魔 三 拜 曉 雪 内 紅 雪 内  
風 平 月 月 秋 芳 久 米 雄  
風 平 月 月 秋 芳 久 米 雄

何の苦も無いのかのつぼに春の風  
劇場でのつば楽しく笑つとり  
乗換える度に荷物を確認し  
星きれいな愛人と手を組む松並木  
大物の汚職どこかでもみ消され  
傷つけた心へ失言では済まされ  
乗換えないいどん行を母選ぼう  
乗換えて見ればほんのそこだつた  
鉛筆一本でいじらしい汚職  
失言をワンマン力で押しとおし  
乗換えた途端に株の値が下り  
乗換えた列車のあととはごみの山  
乗換えてあわてて荷物を置き忘れ  
乗換える度に訛りが皆違ひ

交通局句会 (大阪市) 児島与呂志報

大勢の客に座るとこ指示し  
アーケード日本に平和あればこそ  
橋筋は自分の歩巾がしんどなり  
三十年妻もひからび俺も老い  
丸秘の書類課長は派手に見せてくれ  
七十才の跡振り返る鐘が鳴り  
グラビヤへ楽しめて二人笑つて出  
進学をたのしみにして父帰つてやせ  
楽しみの子供が教育ママにさせ  
女見るだけでも楽し松の内  
楽しみにやつてまんねと儲けとり  
楽しみのグラスして来た手内職  
楽しみの釣竿をじやこにおちよく  
愚痴云うて見てもたのしい市場籠  
紅しみはお茶よ花よと娘を育て  
定年後優柔不断のカレンダー  
美人画へ日付が邪魔なカレンダー  
緑 雨 春 正 翠 季 鉄 翠 翠 翠 翠 翠  
雨 則 則 則 則 則 則 則 則 則 則 則 則

カレンダー二人の秘密丸じるし  
カレンダー美男と美女が笑いかけ  
大安に〇母だけのカレンダー  
永かつた春へ悔なしカレンダー  
カレンダー当てにならない予定書き  
メモ書き込む基地のカレンダー  
追い立てて食うてるよと子の背文け

南海電鉄川柳会 (大阪市) 圭水報

定刻をすぎて大物顔を出し  
定刻にあれば幹事が来ておらず  
打合せ定刻前をよび出され  
定刻に押込みも定率やつぬ  
駅長も来ても能率やつぬ  
聴衆を覗き開幕引延ばし  
誘惑に勝つてさびしい道を行く  
建国記念日旗屋は大きく宣伝し

備前川柳社句会 横山一声報

横山一声報

腰かがめ胸にいちもつある男  
ぜいたくに慣れてぜいたくを知らず  
ぜいたく以上ぜいたく言えぬ母の皺  
ぜいたくの割に年中やせつており  
ぜいたくで無いとせいたく思つとり  
底辺のぜいたく鯨肉を買う  
ぜいたくでないカカロリを計算し  
ぜいたくな棚へ質素な額をあげ  
ぜいたくな暮しの裏に穴があり  
ぜいたくなこの頃駄菓子へむかす  
ぜいたくなく暮しへ日記崩れかけ

高知川柳社 (高知市) 川竹松風報

川竹松風報

片言も誇りも真似る前の薬の名  
良心も誇りも麻薬の前に消え  
病院の近くで薬局よく売れる  
どの薬効いたか神経病が消える  
欣之助 笑風 淡秋 与呂志 高秋 淡秋 与呂志

物音へ女ひとりの夜が寝れず  
 雑音に馴れて都心の隅に生き  
 眠れない音へセコンド刻む音  
 電話では負けて上手に儲けて居  
 電話では済まぬ用事と切ねて居  
 限りあるのちいとしむ愛を換え  
 反対を押し切る母の気の強さ  
 明治百年つづく日本のにぎりめし  
 九ちやんの唄につられて掌を叩き  
 借金を返す順序をチエツクする  
 花に酔うゆとりができぬまま終り  
 悪筆の誠意へ返事すぐにくれ  
 火をつけた憎い男の物を縫い

どんぐり川柳会 (羽曳野市) 川村好郎報

制服の別れ惜むか花吹雪  
 花生けるゆとりも出来た共稼ぎ  
 御調の庭の花までほめて去に  
 退院はまたウエディングドレス待  
 一張羅みてもらいたさに逢いに来る  
 半てんの紋に男を張るまとい  
 傷心を強い野菊に励まされ  
 美しき花にも勝る母の皺  
 病室より窓辺に咲く花ただ見とれ  
 花便り今年は来ない母は亡し  
 花こころやさしき影病みて知る  
 花活ける妻の後身年老ける  
 待ちぼうけ喚わされいらぬ花とち  
 女関のきれいな花にまずひかれ  
 不意の客造花で飾る部屋に入れ  
 晴れの日を知っているかのよき咲き  
 花東が悲しくもたのしくもさせ

茶坊 幽玄 鬼遊 比呂路 成一路 輝二 聖成 宇宙太 重夫 秋ろ 都子 岳人 竜天 武文

野ばら咲く丘も消えぬニュータウン  
 春風に背広がジャンプする若さ  
 ライバルの和服が似合う憎らしさ  
 地味な服人目をさける恋があり  
 服装はその人格のパロメーター  
 あれこれと迷うた服で来たデパート  
 丹前の後姿にみるゆとり  
 式服も借着ですます時代相  
 どの顔も晴衣魔に見える訪問着  
 人間の値ぶちも服でごまかされ  
 洗濯もドラストンタツチの共稼ぎ  
 振袖にドレスにせわしミス日本  
 洗濯が好きな男の不精髭  
 披露宴はじまるまでの花をほめ  
 好わ郎

どんぐり川柳会 (大阪市) 川村好郎報

日帰りのコース名所を一つ抜き  
 一日の疲れをバスで寝て帰り  
 日帰りの旅がやつとの共稼ぎ  
 合格へ京都の空はすがすがし  
 合格のうれしきお隣へ差しつかえ  
 日帰りのうれしき名所は行きつくり  
 初発に乗り最終で帰る忙しさ  
 日帰りのちに良すぎるスケジュール  
 合格の知らせと寄附の通知来る  
 何喋つていのか電話まだ空かず  
 喋るのが自慢で旗を振られる  
 日帰りでよし顔見せてほしい母  
 日帰りでいいとせがまれば妻と旅  
 日帰りの花見幹事は飲めませず  
 日帰りが袖を引かれて沈没し  
 泊らない夫で浮気まだばれず  
 日帰りに浮気も出ます子のみやげ  
 日帰りで来た湯の町の気が変り

静遊 幽玄 水舟 奈々 吸江 一峰 雄峯 草峯 太庸 比呂路 信坊 喜風 双楽 雪貞 生長

日帰りに心残して京を発つ  
 日帰りをしたら安心して居る妻  
 好梅里  
 オースケール川柳会 大坂形水報  
 商魂は足でこまめにききずいて来  
 ほろ酔いのこれから先は足に聞け  
 泣き声止んで寝息を立てている  
 当選へしわがれ声が飛んでくる  
 産声をテープに入れて記念にし  
 ほらいせに犬をたいたいたそのあした  
 留守番は引受け顔の秋田犬  
 猛犬にあらずテリヤの仔が五匹  
 犬小屋の中からのウソ見てる  
 行きずりの犬ジョウクロと呼んで  
 屋上で犬と一緒にの昼休み  
 青有形水谷

佐野卜占著 川柳句集「追憶」(非売品)

故麻生路郎先生の「川柳雑誌社」同人・故田中鳴風先生にも指導うけられ、現在川柳塔社同人である。

—最合傘雨もうれしいものうち (鳴風)

序文に田中美喜子女史をわすらわせず、卜占氏のあたたかさかかじみ出ている。一ページ一句、三行組みの美本。

学説がこんがらかつた一人の死 卜占

発行所 熊本市清水町亀井六一八 熊本川柳研究会





## 本社六月句会

日時 六月五日(月) 午後六時  
会場 自安寺(妙見さん)

市電千日前下車スグ北側  
(電話 211・1478番)

兼題 柳話  
「毒舌」 戸田古方  
「ペビ」 森下愛論  
「朝」 内藤ささ子  
「飛ぶ」 阿万万的  
市場没食子選

席題 三題(題と選者は当日発表) 各題三句  
会費 百五十円

★投句だけの方は切手50円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います

大阪市南区鰻谷仲之町20

川柳塔社

電話 大阪 071 3985番

7月9日は路郎忌句会です。

表紙の2をご覧ください。

## 募集

### 八月号発表(6月15日締切)

川柳塔(10句) 中島生々庵選  
近作柳樽(10句) 北川春巢選  
課題吟(各題5句以内)

「海」 小林孤呂二選  
「寝言」 江国幽谷選  
「表」 工藤甲吉選

★原稿は四百字詰原稿用紙に六枚以内。  
文字は楷書で新かなづかいにしてください。

### 九月号発表(7月15日締切)

川柳塔(10句) 中島生々庵選  
近作柳樽(10句) 北川春巢選  
課題吟(各題5句以内)

「波紋」 都倉求女選  
「リーダー」 浜野奇童選  
「方角」 西森花村選

★川柳塔の投句は本社同人に限りませう。  
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください

## 暑中広告受け

あなたも!

ことしも本誌発展のため、「暑中広告」にもご協力いただくよう広くお願ひすることになりました。

一口二百円、左の寸法でございます。幾口でもお申しこみください。

スペースの関係上、同人名簿に住所を入れておりません

川柳雑誌改題

川柳塔社

振替口座大阪  
三三三六八番

ので、同人の方は暑中広告をご利用いただくと便利かとおもいます。

五分の一段が千円ですのでグループをおもちの方もぜひご利用くださいますように。

なお、活字指定などはご一任ねがいとうございます。

★原稿締切・六月末日・

ゼヒ一口!

★つぎの七月号には、また  
 霞乃先生をわずらわせ、路  
 郎百句ををお届けいたしま  
 す。四月ごろから抽出にか  
 かつておられることをおた  
 よりで知りました。昨年  
 のように珍しい写真をフン  
 ダンに挿入するつもりです。  
 ご期待のほどを。

そうで、これはいい傾向じ  
 やないですか。同人特集は  
 川柳塔のカラーの一つにな  
 ったが、どこさんも同人特  
 集に力を入れた。こう  
 になると筆力のある同人を多  
 く持つているところが強い  
 ですね。おたがいガンばり  
 ましようや。

★路郎先生も水府先生も、  
 川柳家はもつとうまく原稿  
 を書けるようになってくれ  
 ないと、こまると云つてお  
 られた。これはほくが直接  
 両先生からうかがったこと  
 である。

★東野大八氏の原稿を拝見  
 するたびにおもいうのが、  
 毎号のあの二ページ分は、  
 その筆勢からみて、せいぜ  
 い三十分で書かれている  
 ようである。商売ですね。

★今東光氏が、一晩に五十  
 枚書くと云われた。ほくな  
 ど清記するだけでも一晩で  
 五十枚はシンドイ。花登篠  
 氏は三十分ものならホンの  
 一時間ほどでテレビにして

しまうそうだ。ほくがNH  
 Kで二、三分のところに汗を  
 かいていたとき、局の人が  
 らそんな話を聞いて、すつ  
 かりアガつてしまったこと  
 があつた。

★川柳を器用に作る人のこ  
 とを、職人だと云つてケイ  
 ベツするようなムキがあ  
 る。ほくはそうはおもわな  
 い、ほく自身、人さんから、  
 あいつは川柳の職人だよと  
 一度でもいいから云われて  
 みたい。

★阪神の山内外野手は野球  
 の職人だという。この場合  
 は川柳と違つて尊敬に近い  
 表現なのだ

★職人。憎くいことばです  
 よ。

☆ほくの川柳をよんでくれ  
 る人はいないが、漫才を聞  
 いてくださる人がふえた。  
 霞乃先生はいつもはげまし  
 てくださるが、川柳ではな  
 く漫才である。ほくつて  
 へんな川柳家だなとおも  
 う。(不二田一三夫)

疲れ  
 肩こり  
 食欲不振  
 つかれ目  
 神経痛に  
 タケタ薬品  
**アリナミンA**

GOLDEN  
**O.S.K**  
 の紳士服

スマートで  
 着心地のよい



株式会社  
**オーエスケー**

高鷲亜純著 詩 川 柳 考

申込所  
 大阪市東区宗屋町2の34 大坂形水

定価 百二十円(送料六円)

半年分 七百五十円(送料共)

一年分 千四百四十円(送料負担)

昭和四十二年五月二十五日印刷  
 昭和四十二年六月一日発行

大阪市南区神谷中二丁目

編集者 中島蓬太郎

印刷所 大陽印刷株式会社

発行者 川柳塔社

大阪市南区神谷中二丁目  
 電話大阪・二七一三九八五番  
 電報口座大阪・三三三六八番

戎橋  
大阪

# 北極星 味に輝く



戎橋 北極星 (641) 三三三  
結婚式場 やわらぎ殿 五北極 階星 三三三  
永楽橋 営業所 〇七六六  
野田阪神 やわらぎ 〇六〇二  
北極星別館  
野田阪神 営業所 〇四五六  
くまた町 営業所 〇五〇五

料理も電話も

# 551

ここがいちばん

TEL (641) 551-2

広東料理・焼餃子

# 豚饅 蓬萊 焼売

大阪 なんば

◆出張販売店◆

なんば高島屋／心齋橋そごう／梅田阪神／天満橋松坂屋  
堂島地下センター・弁天阜頭支店／中之島サン・ストアー

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可  
昭和四十二年五月二十五日 印刷  
昭和四十二年六月一日発行 (毎月一日発行)

川柳塔 六月号

定価 百二十円 (送料六円)